アンバランスな恋をして

橙子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アンバランスな恋をして

【Ｎコード】
Ｎ９１９６Ｔ

【作者名】
橙子

【あらすじ】
恋愛では「強い女」と言われながら仕事に燃える坂本梓（２８）が巻き込まれた、複雑な恋愛事情とは…？

ハガネの女

――――――ひとの心なんて、外からは見えないのに。「強い」とか「弱い」とか、どうやって決めるの？

「……君はひとりでも生きていけるけど。彼女は俺がついてなきゃダメなんだ」

平日、会社帰りの喫茶店で。対面に座った男がうなだれて、それでもハッキリ告げるのを、坂本梓はぼんやりと見つめていた。ああ。このセリフを言われるのは、いったい何度目だろう？　古くは学生の頃から、つきあった時間は最短で一カ月から最長で数年単位まで、ひとりとして同じ相手はいないのに、告げられる言葉は一言一句ほぼ同じだ。

「君にはほんとうに済まないと思ってる。だけど……」

「いいよ。別れよ」

男の言葉を遮るように言ってから、すっかり冷めてしまった目前のコーヒーをすする。

「え…っ」

「そんかし、ここの代金はあんた持ちね。それくらいの慰謝料は払ってよね」

もしも煙草が吸えたなら、ここで一発煙でも吹きかけてやるところだ。

「ばいばい。それなりに楽しかったよ」

まだ何か言い募ろうとする男を無視して、自分の荷物を持って立ち上がる。店を出ると同時に、すべて聞こえていたらしいウエイトレスのどこかひきつった「ありがとうございましたー」という声が聞こえてくるが、いまの梓にはもうどうでもいいことで…。外に出たとたん、初冬の冷たい風がいきなり吹き荒んで、梓の鼻の辺りまで伸びた前髪――――もう少しで顎のラインまでの後ろ髪に届きそうだ――――を容赦なく乱す。まだ手袋をしていなかった手で軽く整えながら、梓はぽつりと呟く。

「……バカヤローが。別れの言葉ぐらい、個性を見せてみろってんだ」

コートの前を押さえながら、梓は夜の街をひとり歩き始めた。

＊　＊　＊

そして、翌年の春。営業で二度目に訪れたばかりの会社のソファの上で、梓は驚きのあまり目をむいていた。

驚きの対象は、これから取引先となり得るかも知れない会社の社員ではない。梓が指導係として普段自分に同行させている、同じ会社の後輩営業だ。一年前に大学を卒業して入社したばかりで、まだ自分の力だけでは新規契約をとったことのない若い青年だった。その青年がいま、普段の梓の押しにも負けないほどの熱心さで、つい先日飛び込みで訪れたばかりの会社の社員を相手に、自社製品について熱弁をふるっている。

「ほほう。なるほどなあ」

いまや梓が口を挟む隙もないほど、青年――沢村巧（たくみ）は新製品である自社製品のセールスポイントを正確につかんでおり、相手が興味をひかれずにいられないほど絶妙なセールストークを繰り広げている。最近、ヤケに熱心にサービス残業を自発的に行っているなと思っていたが、それはこのためだったのか。同じようにセールスポイントと、さらにウイークポイントまで把握している梓でさえ、引きこまれずにはいられないほど見事なトークだった。

「……やりましたね、先輩っ！！」

先ほどまでいた会社を辞して二十分ほど歩いたところで、ようやく実感がわいてきたのか沢村が隣を歩く梓に声をかけてきた。

「やったのはあんただって。あたしなんか口を挟む暇もなかったぐらい、見事なトークだったわよ」

本気で感嘆しているのを隠さず笑顔で伝えてやると、よほど嬉しかったのか沢村が両手で拳をつくり、「よっしゃあっ！！」と叫ぶ。周りを歩いていた見知らぬリーマンたちが驚いて振り返るのを見て、梓は思わず苦笑する。思えば、自分も初契約をとった時にはこんな感じだった。梓が入社した六年前は、「女に営業がつとまるのか」と冷笑を浴びせる頭の固い上役たちがまだ現役で生息していたから、その悔しさをバネにして努力した結果だったために喜びもひとしおだった。その勢いのままがむしゃらにやってきたから、うるさいオヤジ連中もいまでは黙らざるを得なくなったが。

「全部、先輩が一から仕込んでくれたおかげっス！　心から感謝してますっ！！」

「あたしの力ばっかりじゃないよ。あんた自身も半端なく努力した結果だよ、胸を張りなね」

「ありがとうございますっ！！」

どうして自分と関わる男子社員はこう体育会系になるのか。やはり自分自身に女としての色気が足りないせいなのか。それは梓の密かな悩みであったりする。

いつものくせで後ろ髪を耳のあたりから後ろに払う。しかし思ったほどの重量も長さも感じないので一瞬驚くが、そういえば先週切ったばっかりだったことを思い出して、すぐに納得する。去年の初冬の頃には鼻先の辺りまでだった前髪が顎の辺りにまで伸びたので、この春思いきって後ろ髪と長さをそろえたのだった。

二人で会社に戻ると同時に真っ先に直属の上司に報告し、今回は特に沢村が頑張ったことを告げると、上司はまるで我がことのよう

に喜んでくれ、営業部全体が祝いのムードに包まれた。昨年入った新入社員の中で、ほとんど自分の力だけで新規契約をとったのは今回の沢村が初だったため、同期の間からは「自分も負けてなるものか」という活気がわいていたが。

「やったじゃん、梓。指導係としては、鼻が高いんじゃない？」

社内の自販機の前でコーヒーを飲んでいた梓に話しかけてきたのは、同期の企画部社員の斉田亮子だった。

「相変わらず情報が早いねー」

いつもながら、人並み外れた情報収集能力を誇る友人に、梓は苦笑いを浮べずにはいられない。すると亮子は、自販機で買った紅茶を取り出しながら、意外なことを言いだした。

「それくらい、と言いたいところだけど、あれに関しては注意して行く末を見守ってたからね。あれの企画書出したの、あたしなのよ」

「マジで？」

「そー。だから下手な営業に回されたらたまんないなーと思ってさ。そしたらあんたたちだっていうじゃない、あんたなら安心だと思ってたら、メインになって契約とったのは沢村くんだって聞いて、驚いたの何のって」

「へえ、そうなんだ」

そんな話をしている背後から、梓に声をかける存在があった。

「あ、岡田係長」

梓の入社当時から何かと目をかけてくれている、総務部の岡田和之係長だった。三十になって少々経った頃に係長に昇進し、三十五歳になった現在、そろそろ課長に昇進するだろうと社内でも評判になるほどデキる人物だ。芸能人にたとえるなら谷原章介に似ていると女子社員の間でも評判の、穏やかで人あたりのいい人物だ。

「沢村くんが、自力で初契約をとったって？　おめでとう、やっぱり指導係がいいと伸びも違うね」

「いえいえ。今回のアレは、沢村くんの努力の賜物ですよ。私だって、あそこまでセールスポイントをつかんでるなんて思ってもみませんでしたし」

「何にしても、またひとり将来が楽しみな社員が増えた訳だ。君の次に期待しているよ」

そう言って、係長は笑顔で去って行った。あとには、褒めちぎられて気恥ずかしい梓と、からかうような表情を浮かべた亮子が残される。

「『君の次に期待しているよ』だってさ。やっぱりあの噂はホントなのかねえ？」

「何よ、噂って」

「ほら、岡田係長って二十代の若い頃に奥さまを病気で亡くされて以来、独身じゃん。後妻には、元気がよ過ぎるほど元気な梓をって考えてるんじゃないかって、もっぱらの噂よ？」

そんな話、初耳だ。

「ある訳ないじゃん、そんなことっ　誰よ、んな無責任な噂を流してるのは」

「だって、あんたの入社以来、それまで女性にどれだけアプローチされても軽くかわしてきてたってのに、あんたのことはえらい気にかけてるってうっとこの上司も言ってたわよ？　どうすんのよ、プロポーズなんてされたら」

「ないない。『食べっぷりが見てて気持ちいい』なんて、普通狙ってる女に言うセリフじゃないっしょ」

「なに、そんなこと言われたのー！？」

ぶはっと吹きだした亮子の肩越しに視線を感じて、梓は思わずそちらを見る。その瞬間、可愛らしい顔立ちに似つかわしくない鋭い視線を投げかけてくる若い女性と、目が合った。同じ会社の人間だ、見覚えはもちろんある。総務部の、千葉優樹菜――――岡田係長の部下で、若い男性社員たちからは『我が社のユッキーナ』と呼ばれて人気ナンバー1を誇っている、去年入社したばかりの女性のはずだ。

わからないのは、何故自分がそんな視線を向けられなければならないのかということ。ほとんど話もしたことがないはずなのに、まるで憎んでいるかのような刺すような視線は何なのだろう？

「うわ……あんた、いったい何したのよ。あの目、尋常じゃないわよ？」

梓の異変に気付いた亮子が、その視線をたどっていって気付いたらしく、小声で訊ねてくる。問われても、梓自身心当たりがないのだから、答えようがない。やがて亮子の視線に気付いたらしい優樹菜が視線をそらしたせいで、不毛な見つめ合いは終わりを告げた。

「わかんないわよ……ろくに話もしたことないってのに」

「そういえば、あのコって沢村くんと同期じゃん。じゃああの噂はマジなのかな」

「何よ、噂って」

先刻のこともあるので、半ば警戒しながら梓は訊く。

「あのコが、沢村くんにホの字だって」

時代劇好きな亮子は、時々古い言葉遣いをする。

「ちょくちょく一緒にいて話してるのみかけるって、みんな言ってるわよ?」

「ちょっと待ってよ、あたしと沢村くんは、単なる指導係と後輩の間柄よ? それでにらまれたんじゃ、たまんないわよ〜」

それは、偽らざる本音。でなくても沢村とは五歳も離れているのだ、あっちにしたって自分などが恋愛対象になるはずがないだろう。

「まあ、恋する女には理屈は通じないもんだからね。沢村くんが何かしら決着をつけてくれるまで待つしかないんじゃない?」

それまで、優樹菜の嫉妬の矢面に立たされるのか……ひとごとだと思って、亮子は勝手なことを言ってくれる。

「まあ何にしても、めでたい愛弟子の門出じゃん。今回はめいっぱいねぎらってやんなさいな」

「そうだね、飲みにでも連れてってやるかあ」

気を取り直して軽口をたたいてから、梓は友人と別れてみずからのデスクに戻る。この後の自分の運命の激変に、まるで気付かないままで……。

ハガネの女（後書き）

少しずつ何かが変わっていく梓の周囲。
我関せずを貫きたい梓だけれど、果たしてそれを周囲が許してくれるのか？

○○から始まる恋？

その日の終業後。軽い残業の後、自分とタッチの差でオフィスを出てしまった後輩を追いかけて、梓は慌ててオフィスを後にする。あの後急ぎの仕事が入ってしまったため、「祝いに飲みに行こう」の一言すら後輩本人に告げることができなかったのだ。

「ちょ…っ　待って、沢村く…！」

普段は男に負けないほどの仕事ぶりを誇っていても、さすがに女性である梓の脚で男の沢村に追いつくのは、骨が折れた。間にエレベーター一回分のロスを挟んでいるから、なおさらだ。ようやく追いついたのは、駐車場で沢村が自分の車らしいものに乗りかける直前だった。

「坂本先輩！？　どうしたんですか、何かご用があるなら、携帯にかけてくれればよかったのに」

「あ」

言われるまで、完全に失念していた。

「そんなに息切れするほど走って……それほど急ぎの用があったんですか？」

「急ぎって訳でもないけど…いや、初契約のお祝いをさ、してやんなきゃと思ってさ……」

何とか呼吸を整えながら告げると、沢村は瞬時に驚いたような顔をして。それから、恐縮するような表情を浮かべて、顔の前で両手を振って見せた。

「いえいえ、そんなこといいんですよっ」

「いくないって。誰だって初契約とった時には先輩におごってもらって、そんで自分が先輩になった時には後輩に同じことしてやんの。そうやって、順番に回っていくんだよ」

笑顔でそう言ってやると、沢村は「そういうものですか…」と呟いた。

「そーゆーもんなのっ　さ、飲み行こうかって、車だから今日はダメかあ。それとも、代行車代金くらいおまけしたげるから、今日行くのとどっちがいい？」

言いながら沢村の腕に軽く手をかけると、沢村は一瞬考え込んだような表情を見せて。それから。

「祝いって、飲み以外でもいいんですか？」

と訊いてきた。

「それは、祝ってもらう本人の意向次第だね。形に残るものがいいっつって物をもらった人もいるし、一緒に遊びに行った人もいるし」

と、過去の事例を思い出して軽く言っただけだったのだが。まさか、それ以上の衝撃的な要求をされるなんて、この時の梓には思い

もよらなかった。

「なら、先輩に一緒に行ってもらいたい場所があるんスよ。ちょっと、ひとりじゃ行けないところで」

「ああ、沢村くんがそれでいいなら構わないよ。あたしでお役に立てるんならいくらでも」

彼女と行きたい店の下見にでも行きたいのかな、などと梓は考えたので、まったく深く考えずに答えていた。

「で、どこ行くの？」

「とりあえず、助手席に乗ってもらえます？」

「はいはーい」

やはり深く考えないまま、沢村に促されるままに助手席に乗り込んだ。

何か変だなと思い始めたのは、車が繁華街とはまるで別方向に進んでいくことに気付いた頃だった。知る人ぞ知る隠れ家的な店なのだろうか？

「ねえ、どのへん向かってんの？」

「もう少しですよ」

梓も免許は持っているが、普段はペーパードライバーに近いため――営業という仕事柄、場合によっては社用車を運転せざるを

得ない場合もあるから、完全なペーパードライバーとも言いきれないのだ――――入り組んだ道にはそれほど詳しくない。だから、気付かなかった。沢村が、どこに向かおうとしているのか。

「着きましたよ」

車が到着した場所を見て、梓は驚いた。そこは、お店の駐車場などでもなく、市内でよく使われているイベント会場の駐車場であったから。さすがに時間が時間なだけに、イベントもとっくに終わって、広い駐車場にもちらほらと車が点在するのみだが。

「なに、ここ〇〇プラザじゃないの？　こんなとこにお店なんかあんの？」

「あれ、俺どっかの店に行くって言いましたっけ？」

『他の人の目があるところではあれだけど、二人だけの時は「俺」でも構わないよ、気疲れするでしょ』と前に告げた通り、沢村の口調もくだけたものになっている。

「『ひとりじゃ行けないとこに行く』って言ったじゃん。だから、あたしてっきり、彼女とのデートの下見にでも行くんだと思って……」

「俺、彼女なんていませんよ。好きなひとならいますけど」

しれっとして言う沢村に、梓の好奇心が刺激される。例の優樹菜ならいいのに、というか優樹菜であってほしいという思いが心を満たしていく。これからずっと、誤解されたままなのはたまらないからだ。

「へえ、そんなひといたんだ。あたしの知ってるひと？」
「よーく知ってるひとだと思いますよ」
ということは、優樹菜ではないということか。まさか、亮子だなんて言う訳ではあるまいな？
「俺のことばっか訊いて、そういう先輩はどうなんですか。恋人とか好きなひとはいないんですか」
「あたし？」
予想外の質問だった。
「いないよ、そんなん。いまのあたしは仕事が恋人なのよ～」
そう答えたとたん、沢村の瞳が意味深な色を浮かべたが、梓は気付かない。
「ところで先輩、シートの左側にあるレバー。ちょっと引っ張ってもらえます？」
梓の向こう側を指差しながら、沢村が言う。梓は何の疑いも持たず、暗くてよく見えない中に左手を差し込んで、ごそごそとレバーを探す。
「レバー、レバー……あ、これかな？」
「それを、ゆっくり上に上げてください」

「はいはい」

普段車にあまり乗らないから、沢村の意図にまるで気付かないままで、言われた通りにしてしまった。背中を預けていたシートが、ガクン！と勢いよく後ろに倒れて、何の気構えもしていなかった梓の身体も必然的にそれを追うように倒れ込んでしまったために、思わず悲鳴を上げてしまった。

「ひゃあっ！？」

シートのおかげか痛みはほとんど感じないで済んだが、驚きのほうが大き過ぎて、とっさに目が開けられない。もう何も起こらないことを確認してから、ゆっくりと目を開けたとたん、近くの街灯が車の屋根に遮られてできる影とは明らかに違う影が自分に覆いかぶさっていることに気付いて、ぎょっとする。悲鳴が喉からもれる前にその正体がよく見知っている人物だということに気付き、何とか悲鳴を喉に封じ込んだ。

「さわむら、くん…？」

いったいいつの間に倒したのか、隣の運転席のシートも倒されており、そちらに座っていたはずの沢村が、サイドブレーキやシフトレバーを乗り越えてこちら側にやってきていた。梓の身体に体重をかけないように、器用に脚や腕をシートの端について、梓の顔を覗き込むような体勢の彼の顔は、暗さのせいでどんな表情を浮かべているのかわからない。

「――――自分にできることならいくらでもって言いましたよね」

いつもより低い、感情の読み取れない声。

「確かに言った……けど」

これいったい、どういう状況？　何か…沢村くん、いつもと違う感じで何だか怖いんですけど。

突然の沢村の変貌に、梓の思考はついていかない。思考につられて動けないままだった両手首に沢村の手がのびて、胸の上にあった両手が左右に広げらける。それでも思考は追いつかず、沢村の目的の見当もつかないまま、身体に力が入らない。

「だったら俺、先輩から是非もらいたいものがあるんです」

言いながら、沢村の顔が近付いてくる。ここまでくるとさすがに目が慣れて、沢村の表情も見えるようになるが、真剣極まりない瞳がそこにあった。

「あ、の……」

「ちょっと黙ってもらえます？」

思わず黙ったとたん、唇にあたたかいものが触れて、何も言えなくなってしまった。それが沢村の唇だと気付くのに、きっかり二秒ほどかかってしまい、梓がようやく正気を取り戻した時には沢村の顔は既に離れていて……。

「…ちょっと！？　確かに言ったけど、望みがこんなことだなんて聞いてないわよ！？」

欲求不満のはけ口なら、よそあたってよ！！

そう続けて、梓は両手にぐっと力をこめた…が、両手ともぴくりとも動かない。抑え込んでいる沢村の力がそれを上回ったためだ。

「そんなんじゃありませんよ」

落ち着いたままの沢村の声が、密室に響く。

「相手が先輩だから、したいと思っただけです。先輩じゃなかったら、こんなこと思いもしませんよ」

「はあ！？」

梓の更なる反論は、再び封じられる。またしても近づいてきた沢村の唇によって！

「…っ！！」

今度はまるで味わうように舌が唇の輪郭をなぞり、一瞬の隙を突いてわずかに開いた唇から中へと侵入してくる。

「…っ　んーっ」

必死に抵抗を試みるが、男の力にはかなわない。奥に引っ込めていた舌まで強引にからめとられ、存分に口腔を蹂躙されてから、よ

うやく梓は解放された。互いに少々乱れた呼吸を整えながら、沢村は再び運転席へと戻り、運転席のシートを元通り起こす。

「なん…っ　の、真似、よ…っ」

いまだ整えきれない呼吸の中、途切れ途切れに言いながら、キッと沢村をにらみつける。その視線の鋭さに気付いていないはずもないのに、沢村は平然と「したかったから」と答えた。それを聞いた瞬間、シートを起こしたほうが楽であることも忘れ、梓はみずからの腹筋の力で勢いよく起き上がり、憤怒に燃える瞳で真正面から沢村を見据えた。梓が本気で怒っていることも、この一年の付き合いでわかっているだろうに、沢村はまったく動じることなくその視線をまっすぐ受け止めている。

「ざけんじゃないわよ、アラサーでフリーの女だったら、喜んでほいほいさせるとでも思った！？　女コケにすんのもいい加減にしなさいよっ！？」

「そんなんじゃないって、言ってるじゃないですかっ！！」

梓の声に負けないぐらいの大声で、沢村が叫び返してきた。それにはさすがの梓も驚いて、一瞬押し黙ってしまう。

「『相手が先輩だからしたいと思った』って、俺ちゃんと言ったじゃないですか。信じてくれないんですか？」

「はあ？」

梓には、何が何だかさっぱりわからない。

「先輩が好きだからに決まってるじゃないですか」

さすがにその言葉は恥ずかしかったのか、沢村は夜目にもわかるほどに頬を紅く染めて、ハンドルの上部に両手をかけてフロントガラスの向こう側を見やった。

好きって……沢村くんが？　あたしを――――？

梓の思考が一瞬止まり、それからじわじわと言われた言葉が心に浸透していく。

「……はああっ！？」

思わず素っ頓狂な声を出してしまったとしても、梓には罪はないだろう。

「恥ずかしいじゃないですか、あんまり派手に驚かないでくださいよ」

沢村の言葉を聞きながら、先刻と同じようにレバーを引いてシートを起こして、微調整をして体重をあずけてからそちらを向くと、沢村は気恥ずかしそうないらだっているような、微妙な表情を浮かべた横顔を見せている。

「あんた何言ってんの？」

梓の唇が、ほとんど無意識に言葉を紡ぎだしていた。

「あたしといくつ差があると思ってんの？　五歳よ、五歳！」

「わかってますよ」

間髪入れずに返る、どこか拗ねた響きを残した声。

「まだまだ青二才のくせして生意気言うなっていうんでしょう」

青二才？　確かに思わなくもないが、それより大きな期待感――――今日の初契約の手際といい、こいつは大化けするかも知れないぞ、という、近い将来自分の地位を脅かすのではないかという焦燥感と同じくらいのそれだ――――を沢村には抱いていたため、そんなことは頭からすっかり抜け落ちていた。思わずきょとんとした梓に気付いたのか、半ば恐る恐るの表情で沢村が下から梓の顔を覗き込んでくる。

「……違うんですか？」

「つか、経験不足はこれからの頑張り次第でいくらでも埋めていけるというのが、あたしの持論のひとつだけど？」

ほとんど無意識に持論のひとつを展開した梓の前で、沢村の表情がぱあっと輝いた。それを見た梓は、つい先刻までの流れといまのそれとを結び付けて、ようやくそれが何を意味している言葉だったのかを悟った。しまったと思った時にはもう遅い。気付いた時には、歓声を上げて抱きついてくる沢村の胸の中に閉じ込められていた。

「ちょ、ちょっと沢村くん…！」

「五歳年上だって、俺は全然気にしないっスよーっ！　つか先輩なら、十歳年上だって全然構わないぐらいっス！！」

「ちょっと待ってって…！！」

必死で言い募るが、沢村は止まらない。気付いたら、再び唇をふさがれて、また何も言えなくなってしまった。

頼むから、あたしの話を聞けっての！！

梓の頭の中で、昼間聞いた亮子の言葉がぐるぐると回る。総務のユッキーナこと、千葉優樹菜のことだ。あんなに想ってくれている、若くて可愛い同期の女の子がいるというのに、何故自分なのだ？もしかして、頼りになる先輩に対する尊敬の念を、恋と勘違いしているのではないだろうか。そう言ってやりたいけれど、沢村の暴走は止まることなく、梓には発言する隙さえ与えられない。

まあいまさらこれぐらいで照れる歳でもあるまいし、と梓は延々と続く若さゆえの過ちとしかいいようのない暴走を、冷静極まりない精神状態で受け容れていた……。

○○から始まる恋？（後書き）

それどころではないことを考えていた梓。それとも現実逃避？

次回、意外？な相手が参戦予定。

三角関係勃発？

――――――昨夜のことみんな、夢ならいいのに。

そんなことを思いつつ、明朝、梓はいつものように出社する。会社を目前にしてかけられるのは、聞き慣れた声。

「先輩、おはようございますっ！！」

いま一番、会いたくない相手の声だった。

「……おはよう」

いつも以上にテンション上がりまくりの相手とは対照的に、梓の機嫌は急降下していく。

「元気ないですね、どうかしたんですか？」

誰のせいだと思っているんだと言いたいのを抑えながら、「昨夜ちょっと眠りが浅くてね」とだけ答える。実際、眠りが浅かったせいかあまりよろしくない夢ばかり見てしまって、気分は最悪なのだ。現実とほとんどテンションの変わらない誰かさんが夢の中でも押しまくってくるわ、般若の面を被った優樹菜が出てきて恨み事を延々呟きまくるわで、目が覚めた時の安堵感は半端なかった。けれど、現実も大して変わりがないことに気付いて、気分は再び最悪状態で

ある。

「大丈夫ですか？　体調が悪いなら、無理に来られなくても……」

「体調は大丈夫」

それだけ答えて、梓は再び前を向いて歩きだす。

あの後――――何度もキスを交わして気が済んだらしく、最高に上機嫌になった沢村とは対照的に、予想外の展開に「明日の昼は何を食べるかな」などと現実逃避としか思えないことばかり梓は考えてしまって。浮かれまくった沢村は何も話さなくても満足気だったが、梓はもはや何を言っていいのかわからなくて、沈黙に包まれた車内のまま、沢村は梓を家まで送ってくれた。常の梓なら、個人的に親しくない相手には家の近くにまでしか近寄らせないが、沢村には年賀状交換で住所もばっちり知られているので、もうどうでもよくなっていた。「よかったら、食事でもご一緒に」とも言われたが、とにかくもう一刻でも早く帰りたかったので、「食べちゃわなきゃいけない食材があるから」と断った。

「送ってくれて、サンキュ」

とりあえず礼だけはちゃんと言わないとと思い、車から降りてから運転席側に回って告げた梓に、沢村は満面の笑みで、

「いえいえ。こちらこそ、ご馳走様でした」

などと言ってきたので、梓は反射的に右ストレートを繰り出しかける自分の拳を押しとどめるのに、精いっぱいの努力を要することとなった。

よくもぬけぬけと言いくさりやがって…！

半ば無理やりだったくせにと思いつつ、別れの言葉を口にしてきびすを返し、そのまま一度も振り返ることなく一人暮らしの部屋へと入って行く。それを見届けていたらしく、その直後沢村の車が去っていく音を聞きながら、梓はやはりどうでもいいことを考えながら、着替えたり風呂を沸かしたり休みの日にストックしておいた食料で食事を済ませたり……とにかく何も考えたくなくて、さっさと日課を済ませて寝てしまった。それで安息が得られたかどうかは、前述の通りだが。

冗談じゃない、と梓は思う。沢村のことは決して嫌いではないが、それはあくまでも後輩としてであって、男性としてではない。そもそもそんな対象として考えたこともないのに、いきなり言われてもそう簡単に結論を出せるものか。それでなくても、今回は優樹菜のこともある。だいたい梓は、恋人を奪われることはあっても、奪ったことは一度もない。奪っていく相手は、たいてい優樹菜のようなタイプの女の子で、梓にとっては鬼門といえるタイプといえよう。だから極力近付きたくないというのに、何ゆえこんな形で巻き込まれなければならないのか。「彼女は俺がついてなきゃダメなんだ」と男に言わせるタイプほど中身は誰よりもしたたかであるということを、梓は誰よりも知り尽くしている。

「これだけは言っとくけど。会社では、個人的な感情は持ち込まな

いこと。わかってるね？」

沢村の説得は時間がかかりそうなので、とりあえず社内で妙な言動をまき散らさないように、釘を刺す。沢村はそれを梓が照れているものと思っているのか、満面の笑みでよいこのお返事をやってのけた。勘弁してくれと梓は思う。

いつものように会社のビルに入り、エレベーターホールに向かうと、沢村同様、いま一番会いたくない相手と出くわしてしまった。用事を思い出したふりをして逃げようかと思った瞬間、その相手の向こう側にいた見知った顔にさわやかに挨拶を投げかけられて、それもかなわなくなってしまった。

「おはようございます、岡田係長…と、千葉サンでしたっけ？」

すっとぼけて笑顔で言うと、向こうもさすがに上司の前では公私混同ができないのか「おはようございます」と言いながら会釈してくる。そのうつむいた頭の下で、どんな表情を浮かべているのかと想像するだけで、梓のテンションはさらに急降下してしまう。こちらもさすがに顔には出さないが。

「おはよう、千葉」

「あら、沢村くんも一緒だったの？　おはよう」

しらじらしいなあと思いつつ、やってきたエレベーターに皆で乗り込む。正直このメンバーで乗り込むのは勘弁してほしいが、仕方ない。まあ係長や他の社員もいれば、そうそう優樹菜もあからさまな行動には出ないだろう。

「…坂本くん、何だかいつもより元気がないように見えるけど、体調でも悪いのかい？」

岡田の声にハッとして、すぐに笑顔で手を振って見せる。

「全然、元気ですよ。ただちょっと、昨夜は眠りが浅かったので眠いだけです」

「ならいいけど」

ああ、いまの自分には、係長はオアシスだなあと梓は思う。さわやかな顔で、俗世の喧騒とは無縁そうだ。

梓・沢村・優樹菜・岡田の順で横に並んでいたので、岡田から視線を外した際に、ふと小柄な優樹菜の横顔が目に入った。優樹菜はこちらを見ようともせずに軽くうつむいていて、そっと瞳を閉じている。直毛で真っ黒な梓の髪とは全然違う、やわらかそうな長い髪をいつも女らしい凝った髪形で束ねていて、色白の肌はきめ細かく、二重の瞳はくっきりはっきり、薄い唇にはピンクのルージュがよく似合っている。何ゆえ受付嬢にされなかったのか不思議になるほどの美少女――――沢村の同期なら二十は確実に越えているはずだが、「少女」という形容がぴったりくる愛らしさだ――――で、自分とはえらい違いだと梓は思った。

沢村が隣にいるせいか、わずかに頬が紅潮しているように見えるのは気のせいか。

こうしてれば、ただの可愛い恋する乙女にしか見えないのになあ

……。

たとえ、中身が般若だとしても。今朝の夢を思い出し、梓は誰にも気づかれないように小さなため息をついた。

それから二、三日は、平和な日々が過ぎていった。心配していた沢村も、公私混同はしないと決めているのか社内では以前と変わりなく接してくるので、あの日のことは夢だったのではないかと思うほど、梓の気分は楽になってきていた。……その日までは。

沢村と取引先に出向いた帰り。あちら側にもこちら側にもハプニングが生じたため、思っていた時間をだいぶ過ぎてからの帰宅と相成ってしまった。一応直帰になる可能性も告げていたので、職場には電話一本しただけで済んだのだが、問題はマイカー通勤している沢村だった。

「これから社に戻って車で帰るんでしょ？　大変だね。あたしは電車通勤でよかったー」

取引先の位置関係から、これから社に戻ってから帰るとなると、かなり大回りをしなくてはならない。けれど電車なら、一度の乗り換え程度で済むので、帰るには楽なのだ。肉体的な疲労も去ることながら、いまはとにかく沢村から離れたかった。素知らぬ顔をして以前のように振舞うのは、思った以上に精神力を必要とする行為で、精神的な疲労が半端なかった。

「いえ、俺も今日は電車で帰ります。車は会社に置いていって、明日の朝は電車で行けばいいし。それに……まだ先輩と別れがたいし」

照れもせずに笑顔で告げる沢村に、梓は「はは…」と乾いた笑いを浮かべる。さすがに限界を越えてしまって、途中にあった橋の上の歩道で、ずっと言いたくて仕方なかったことをついに口にしてしまった。すっかり暗くなった橋の上は、ひっきりなしにライトを照らして車は通るものの、歩いて渡る人間は他にほとんどいなかったせいもあるだろう。

「――――あんたさあ。何か勘違いしてるんじゃない？」

「何がですか？」

「あたしのこと好きだとか何とか言ってたけどさ、それってできる先輩に対するって自分で言うのも何だけどさ…尊敬とか憧れとかなんじゃないの？　あたしがたまたま女だったから、勘違いしちゃってるだけなんだよ、きっと。学生時代からよくあったしさ」

できるだけあっさりとした口調で、さらりと言いきってやる。学生時代から云々という話は、実際にあったことなので、安易に想像がつく。だから、そう簡単に浮かれてはいけないのだ。冷静になれば、男は結局自分が守りたいと思う相手の元へと走って行くのだから。

「だから、もう少し頭を冷やして……」

言いかけた梓の言葉は、そこで不自然に途切れさせられた。梓の肩をつかんでそちらを向かせて、突然唇を奪ってきた沢村によって！　唇が離れると同時に、先ほどまでの淡白さはどこへやら、梓は

カッとなって叫んでいた。

「あんた…あたしの話聞いてたの！？」

「聞いてましたよ」

「だからあ、あんたのそれは恋愛感情じゃないって……」

「先輩は俺じゃないのに、どうして俺の気持ちがそうじゃないってわかるんですか」

梓でさえ気圧されそうなほどの、気迫に満ちた瞳と声だった。

「だ…だって、いままで告ってきた年下の奴みんなそうだったんだよ？　そうとしか思えないじゃん」

それも、事実。

「そんな、先輩の表面しか見ていなかったような奴らと一緒にされたくありませんね」

「あ…あんたにあたしの何がわかるっていうのよ！？　たかだか一年、仕事で一緒に過ごしただけの奴に！！」

普段の梓なら絶対にしないような、感情的な叫びだった。そんな部分を見せたが最後、「所詮女は感情でしか物を言えない生き物だ」と、二度と剥がすことのできないレッテルを貼られることがわかっていたから、それだけはするまいと就職した時に誓いを立てて、それ以来どれほど理不尽な扱いを受けようともすべて冷静に乗り越えてきたというのに。

「――――俺。去年の初冬の頃、仕事を辞めようかと思うほど、鬱っぽくなってたんです」

唐突に。ほんとうに唐突に、沢村は意味のわからない話を話し始めた。いったい、いままでの話と何の関連があるというのだ？

「先輩に親身になって仕事を教えてもらっても、全然活かせなくて……契約も全然取れないし、自分は営業に向いてないんじゃないかって毎日悩んで。先輩の前ではおくびにも出さなかったけど、毎日仕事に行くのが苦痛で苦痛で仕方なかったんです」

訳がわからなくて、梓は口を挟むこともできず、淡々と語り続ける沢村を見つめることしかできなかった。

「あの日も、まっすぐ帰る気になれなくて途中の喫茶店に入ってぼーっとしてたら、先輩が男の人と待ち合わせしてたみたいで入ってきて。何か顔合わせづらくて、俺思わず隠れちまったんですよ。会社で見せてたみたいな、『悩みなんか何にもありませーん』ってな顔作れる自信がなくて……」

去年の初冬の待ち合わせ？　まさかとは思うが……あの別れ話の時のことではあるまいな！？　いつもはどちらかの部屋か食事のできるところで会っていたから、あれ以外のことで喫茶店に入った記憶など、梓にはない。

「そしたら、相手の男の人が別れを切り出してて……俺、二重にヤバいことになったって思って、本読むふりしてそっちに顔を向けないようにして。だって、万が一修羅場になった時に俺が聞いてたって知られたら、その後先輩とどう接していいかわかんなくなっちま

うじゃないですか。会社では冷静極まりない先輩だけど、プライベートでまでそうとは限らないし。厄介なことになったなーと思いながら、先輩の動向についつい聞き耳立ててたら、ホントにあっさりと『いいよ、別れよう』って……あの時他に聞いてた人も同じこと思ったと思いますけど、どっちが男だよと思っちまいましたよ。相手はまだグダグダ言ってるのに、先輩はサバサバした態度でさっさと席を立って。やっぱ先輩はすげえなあ、プライベートでも全然性格変わんねえんだあって変なとこで感心しながら、店を出ていく先輩の横顔を見た瞬間、何か気になるものを感じちまって……いつもの先輩とほとんど変わんないのに、何故かその時はどうしても見過ごすことができなくて、さりげなく席を立って先輩の後を追っかけたんです」

何だろう。その先は、すごく聞きたくないことのような気がする。梓は耳をふさぎたい衝動に駆られてしまった。

「急いで会計して先輩の向かった方向へ走ったんですけど、先輩の姿は既に見えなくて。いくら何でも、俺の脚より速く去れるはずなんかないのにってぼんやりと歩いていたら、どこからか掠れた声みたいのが聞こえてきて……どこからだろうとほとんど無意識に探していたら……」

「わ――――――っ！！　やめてっ　もう聞きたくないっ！！」

梓には、そこまでが限界だった。

三角関係勃発？（後書き）

ついに優樹菜も参戦。ストレートに感情を外に出せるのは若さゆえか。

梓の苦悩はまだまだ続きます。

彼女の真実、彼の想い

どうして梓が急にそんなことを言い出したのか。沢村巧にはわからなかった。

「あたしのこと好きだとか何とか言ってたけどさ、それってできる先輩に対するって自分で言うのも何だけどさ…尊敬とか憧れとかなんじゃないの？　あたしがたまたま女だったから、勘違いしちゃってるだけなんだよ、きっと」

そんなんじゃないと反論しかけたその時、「学生時代からよくあったしさ」と付け足しのように付け加えられた一言で、沢村はすべてを悟った。

そうか。以前このひとに告白した奴らがそんな奴ばっかりだったから、自分の告白もそれと同じようにとらえられていたのか。冗談じゃない。そんな、彼女の表面だけしか見ていない連中と一緒にされてたまるものか。

「あ…あんたにあたしの何がわかるっていうのよ！？　たかだか一年、仕事で一緒に過ごしただけの奴に！！」

普段の梓を知る者が見たら心底驚くに違いないほど、感情をあらわにした叫びだった。沢村だとて、こういう話をしている自覚がなかったら、きっと驚いていたことだろう。だから、彼女を好きになったきっかけを話すことにした。梓本人にしてみれば、絶対に誰にも知られたくない事柄だっただろうけれど、自分がどれだけ本気か

わかってもらうために、背に腹はかえられなかった。

突然、脈絡のない話を始めた沢村に、梓は怪訝そうな表情を隠すことなくこちらを見つめてきた。彼女からすれば、当然のことだろう。実際、いままで話していた内容とはかすりもしない、沢村自身の独白のようなものだったから。沢村からしてみれば、あのことがなかったらいまごろ会社を辞めて、彼女のほんとうの姿など知ることもなくそのまま一生を終えていたかも知れなかったのだから、ある意味人生を変えてしまうほどの衝撃的な出来事だったのだ、あの晩のことは。

『――――他に好きなひとができた。別れてほしいんだ』

見知らぬ男の声が聞こえてきた時は、「おいおい、修羅場かよ。勘弁してくれ」としか思わなかったというのに。

『君はひとりでも生きていけるけど。彼女は俺がついていないとダメなんだ』

うわー、すげーありきたりなセリフ。てゆーか、んなセリフいまどきマジで使う奴いるんだ。先輩、男の趣味わりーなあ。

などと、失礼極まりない感想ばかり抱いていた沢村だったが、梓の態度には思わず感嘆し、毅然と立ち去る姿を是非鑑賞したいと思ってそちらを向いた瞬間。いままで感じたことのない何かを梓の横顔から感じ取って、ほとんど無意識に立ち上がっていた。あの時感じたそれが何だったのかは、いまでもわからない。けれど、その時の梓からは、放っておけない何かを感じたのだ。理屈ではなく、心の奥底で。

気付いたら、荷物をすべて持ってレジに向かっていた。財布を開けるのももどかしく、代金を渡して釣りを受け取るわずかな間にコートを羽織り、すぐにでも走れる準備を整える。受け取った釣りを財布に入れている間に、脚は既に走り出していた。ほんの数十秒前に出ていったばかりの梓を追って。彼女に追いついて、どうするのかなど考えていなかった。ただ、いまの彼女をひとりで放っておくことなど、この時の沢村にはできなかったのだ。理由なんて、自分にもわからないのに。

慰めたかった？　励ましたかった？　梓自身は放っておいてほしいかも知れないのに？　同じ会社の、指導係として接している後輩になんて見られたくなかったかも知れないのに？　それでも、追わずにはいられなかったのだ。

いない――――？　店を出た時間差はほんの数十秒しかなかったというのに？

自慢ではないが、沢村は決して鈍足ではない。学生時代は、ほとんど毎回リレーの選手に選ばれていたほどだ。しかもいまは、梓の姿を見逃すものかと目を皿のようにしていたのだから、見逃したということもない。となると、どこかそのへんのビルか店に入った？

そうだとすると、沢村にはもうどうしようもない。焦りが心を占め始めた沢村の耳に、小さな、ともすれば聞き逃してしまいそうなほどの声が届いたのは、次の瞬間だった。

「……っ　ひ…っ」

一瞬、誰かのしゃっくりかと思えるような声だった。けれど、沢村はその声が妙に気になって……気付いたら、そちらに向かって歩みを進めていた。

それは、ビルとビルの間――――――通用口が違う側についていて、双方とも壁しかない側でありなおかつその先は突き当たりで誰もいないはずのそこに、沢村は気配を感じた。一瞬ネコか何かかと思ったが、そうではなかった。積み上げられた箱の向こう側で、座り込んでいるらしい女性の脚がちらりと見えて……顔も服装も見えないのに、沢村にはそれが梓だと確信できた。相手に気付かれないように、少しずつ身体をずらして角度を変えて、女性の顔を確認する。

「…っ！」

ほとんど無意識に確信していたが、改めて確認すると衝撃は段違いだった。

あの、梓が。普段は「竹を割ったような性格」と評されて、どんなことがあっても冷静に大人の対応で対処している梓が。まるで小

さな子どものように、大粒の涙をぼろぼろとこぼし、けれど嗚咽すらもらすまいと懸命に声を押し殺して、こんな…誰からも見えないようなところで独りで泣いているなんて。沢村は、頭を強く殴られた錯覚を覚えるほどの衝撃を受けた。

家に帰りつくまでの時間も耐えられないほど――――もしかしたら、あれ以上あの場にとどまっていたら決壊していたほど、梓の中では限界が迫っていたのだろうか？　それならば、あの潔さも納得がいく。別れを切りだされて泣いてすがる女性も多いだろうが、既に心変わりをしている男をそれでつなぎとめることができる可能性は限りなく低いだろう。だから梓は、最後まで徹底的に自分のスタイルを崩さず、「いい女」を演じきったのか。相手を想うあまりに困らせたくなかったからなのか、それとも自身のそんな部分を見せたくないという自尊心からなのかはわからない。けれど梓は、完璧に演じきり、誰もが梓は「そういう女だ」と感嘆せずにはいられないほどだっただろう。ほんとうの梓の姿など、誰一人知ることもなく――――これまでもずっと、いまのように陰で独りで泣いていたのだろうか。こんな、お世辞にも綺麗とはいえないような場所で。誰にも気づかれないように声さえ押し殺して。

さりげなく、ほんとうにさりげなく少しずつ身をずらして、ビルの壁の端に寄り掛かるようにして、沢村はポケットから携帯を取り出して着信チェックでもしているような顔をして、いかにも人待ちをしているかのように装ってみせる。沢村のように、ほんの小さなきっかけから梓に気付く人間がいないとも限らない。だから、梓の姿がギリギリ見える位置に自分の身を置いて、他の誰からも梓の姿が見えないように――――梓が気の済むまでそうしていられるように、沢村はいつまでもその場に立ち尽くしていた。そして、梓が身じろぎをして立ち上がろうとする気配を察すると同時に、またさりげなく通行人にまぎれて夜の街に溶け込み、自分とは反対の方向

――――梓が利用している線の駅がある方向に彼女が向かうのを見届けてから、沢村はそれからようやく自分も帰路についた。

梓が気になりだしたのは、それからだった。

家に帰っても、食事をしていても、テレビを見ていても、頭を占めるのは梓のことばかり。いまごろまた独りで泣いているのだろうか、それとも彼との想い出の品でも放り投げているのだろうか、それともふたりで写した写真でも破っているのか――――考えても仕方のないことだとわかっていても、考えずにはいられなくて。深夜ベッドに入っても、なかなか寝付かれなかった。

寝不足の頭を抱えながら出社した沢村の前に現れたのは、いつもと変わらない――――否、変わらないのは態度と笑顔だけで、心なしか化粧もいつもより濃い目で、ケアをしても間に合わなかったのか目元もいくらか腫れていて……目ざとい女性社員に指摘されてもまるで慌てることなく、

「最近買った村上の本が読み終わらなくってさ～。つい夜更かししして読んじゃったよー。おかげで寝不足だわ顔色もよくないわで、さんざん。まあ面白かったからいいけどさ、これで面白くなかったら本放り投げてるところよ」

と普段と変わらずけろりとして答えたから、誰も疑うことなく「あるある」などと笑ってその話はそこで終わりになった。

「沢村くん、何ぼーっとしてんの。ほら、B社さんのアポに遅れるよ、さっさと支度して！」

「は、はいっ！！」

あまりにも。あまりにもいつもと変わらなかったから、沢村のほうが慌ててしまうほどだった。

「あそこは遅れるとうるさいからねー、よく覚えておきなね」

梓の後に続きながら、沢村は思わず自分より頭一つ分低い梓の背を凝視してしまう。いままで意識したことはなかったが、細い…細い肩だった。腕だって首だって、自分のそれとは違い過ぎるほどに細く、力いっぱい抱きしめでもしたら、折れてしまうのではないだろうかと不安になるほどだった。こんな細い身体で、あんなにも深く苦しい悲しみに耐えていたのか。誰にも頼ることなく、誰にも真相を明かすこともなく――――ずっと独りで。

そう思ったら、沢村は堪らなくなった。少しでも、彼女の肩にかかる重圧を減らしてあげたいと思った。彼女の心を苛む憂いを、なくしてあげたいと思った。彼女がほんとうの意味で笑っていられるように、守ってあげたいと思った――――。

橋の欄干に腕を乗せて川を眺めながら、沢村が長い話を終えた時。その耳に、ドサ…と何かが落ちる音が届いた。思わずそちらを見ると、梓の足元に彼女が持っていたさまざまな資料が入っていたショルダーバックが落ちていて、当の梓は真っ赤な顔をして震える両手で口元をおおっていて……その表情は、想い出の中の彼女と同じように初めて見せる、どうしていいのかわからないと言いたげな、戸惑いと羞恥のみに彩られた表情だった。

「――――どう…して……」

梓の唇が、震える声を紡ぐ。

「どうしてよりによってそんなとこ見てるのよ！？」

「だから、偶然だって……」

「偶然でも何でも、そんなとこにいないでよっ　気付かないでよっ」

無茶苦茶な言い分だ。とても梓の言うこととは思えない。

「何で追いかけてくるのよっ　何で見つけるのよっ」

もう、梓自身さえも自分が何を言っているのかわかっていないのかも知れない。

「あんたがそんなことしなければ……そんなこと話したりなんかしなければ、あたしはいままでのあたしのままでいられたのに！」

いまにも泣きだしそうな声と表情だった。あの時と同じ――――否、あの時と違って、彼女にそんな思いをさせているのが誰でもない自分だとわかっているからこそ、胸が締め付けられそうになるほどせつないそれだった。気付いたら沢村は走り出して、梓をその胸の中に抱きしめていた。

「は、放してよっ！！」

胸の中で梓が力いっぱいの抵抗を見せるが、沢村は頑として退かなかった。どれだけ胸や腕をたたかれようが、腕を伸ばしてきた梓に何度頬をひっぱたかれようが、絶対にその身体を抱きしめる腕の

力を緩めることなく、梓が根負けしておとなしくその身を委ねるまで、抱きしめ続けていた。

そんなふたりの姿を、ひっきりなしに通り過ぎる車のヘッドライトが照らし続ける。それでも沢村は、ようやく腕の中に閉じ込めた愛しい存在を、強く、けれど決して壊してしまわないように大事に大事に抱きしめていた。他の誰にも渡したくないと思う心のままに。

悲しみからではなく、恐らくは羞恥や屈辱のために涙をこぼし、肩を震わせる彼女の身体を抱きしめながら、彼女の内面を知ったあの日からずっと伝えたかった言葉を、もう一度繰り返す。

「何度でも言います。尊敬や憧れなんかじゃない。等身大の貴女だからこそ、俺は貴女が好きなんです――――――」

彼女の真実、彼の想い（後書き）

初めての？沢村くんの内心暴露話です。
守りたいと思った相手ができた時、男は大人へと変貌を遂げるのでしょう。

素顔のままで

――――――悔しさと怒りと恥ずかしさが頭の中を渦巻いて。

いま自分の心を占める感情を何と呼ぶものなのか、梓自身にもわからない。

いつだって、冷静ぶって。いつだって、格好つけて。いつだって……いい女ぶって。ホントの自分をさらけだすのは、家の中、それもひとりでいる時だけと決めていたのに。なのに、いまの自分はどうだ？　他のどんな時よりも見られたくないと思っていた泣き顔――――それも嬉し涙とか悔し涙とかそんなんじゃなく、たかだか男にフラレた時にこらえられなかった涙を見られて。それもあそこなら絶対に誰にも見られないと思っていた場所に隠れていたというのに、しっかり見られて、他の人からは見られないようにと武士の情け（？）までかけられて。

完全に冷静さを欠いて、感情の昂るままに叫んでいたところを抱き締められて、必死に抵抗をしたにも関わらずすべて抑え込まれて、ほんとうにもうどうしていいのかわからなかった。いままで培ってきたすべてが、足元から崩れた気さえした。自分のすべてをかけて作り上げてきたものなんて所詮砂上の楼閣だったのだと、頭のどこかから声がする。それが悲しくて悔しくて情けなくて、自分でも気付かないうちに、瞳から涙があふれ出していた。もう、止められないほどに。

「何度でも言います。尊敬や憧れなんかじゃない。等身大の貴女だからこそ、俺は貴女が好きなんです――――――」

いろんな感情がごっちゃになって、もう自分でも何が何やらわからなくなっている梓の耳に、静かな沢村の声が届く。かすかな、安堵感と共に。

すべての鎧も武器もなくなって。取り繕うことさえできない状態なのに。「そのままの自分でいい」と言われた気がした。社会の第一線で戦う者としては、それは失格を意味するのに。武装していなければ、自分さえ保っていられない気さえするのに――――――。

「だから、俺は強くなろうと思ったんです。貴女を守りたいなんて、おこがましくてまだまだ言えませんが。せめて、貴女の支えになりたいと……少しでも、貴女のお役に立てるぐらいになろうと――――誓ったんです」

沢村の言葉が、自分の心にどう作用したのかは、梓にはわからなかった。けれど、涙は少しずつ止まり始め、あれほど昂っていた感情さえも凪いだ海の如く静まって行くのを、梓は確かに感じていた。

「他の誰にも、貴女のほんとうの姿を話すつもりなんかありません。貴女を傷つけるつもりなんか……初めからなかった。いや違うな。貴女を傷つけるものすべてから……貴女を守りたかった。いつだって、心から笑ってほしかったんです――――――」

もう一度、梓の身体を強く抱き締めながら、沢村は告げた。嘘偽りなど、まるで感じ取れない真剣な声で。

「もう、独りで戦ってほしくなかった。まだまだ頼りにならない俺だけど、いつだって貴女のために持てるすべてをなげうってでも、貴女の盾になりたいと……思ったんです」

そこで沢村は、そっと梓を解放した。梓は化粧が崩れてぐしゃぐしゃになっていることも忘れ、彼の顔をじっと見上げていた。先ほどまでの激情も、すべて忘れたかのように。梓の手を握ったまま、沢村は続ける。

「この間は、初契約がとれて浮かれてました。『何でもいいからご褒美をやる』なんて言われて、つい我を忘れてしまって……貴女が嫌なら、無理に貴女を自分のものにしようなんて思いません。ただ時々、プライベートで会ったり話してくれるのを許してさえもらえれば……」

優しい、けれど真剣な声。その瞳は誠実そのもので、疑う余地などないように思えた。ほんとうに……沢村の言葉は、気持ちは真実なのだろうかと思い始めたところで、その瞳に映る自分の姿を見てハッとする。

「ちょ、ちょっと待って！　いまあたし、めちゃくちゃひどい顔になってるから！！　ど、どこかトイレとか洗面所のある場所ない！？」

くるりと沢村に背を向けて、あわてて先刻落としたバッグを拾う。中からコンパクトを取り出して鏡にみずからの顔を映してみると、よくもまあ他人に見せられたものだと自分でも感心するほどのひどい化粧崩れをした顔がそこに映っていた。

「た、確かこの橋を渡った先にコンビニが……」

梓の剣幕に気圧されたような沢村の声を聞くや否や、梓は背を向けたまま歩きだしていた。

「とにかく話はあと！　先に化粧直させてっ　こんな顔じゃ、電車にも乗れやしないわ！！」

言うが早いか、ほとんど小走りで歩きだす。

「あっ　先輩、待ってください！」

後から追いすがるような沢村の声にも、一度も振り返らずコンビニを目指す。さすがに明る過ぎるほどに明るいコンビニに入る時には、沢村を盾にして後から入り、他の誰にも顔を見せないようにしてトイレへと駆け込んだが。明るいトイレの鏡で改めて見ると、ほんとうにひどい顔をしていて。よくもまあ、沢村はこの顔を見てビビらなかったものだと感心してしまうほどだった。一度水で軽く洗い流してから、もう一度化粧をし直す。それくらいしないと、とてもではないが直しきれないほどだったから。そして気付く。沢村のスーツにも、顔拓とでもいうのだろうか、とにかくそういうものを、べったりつけてしまったのではないかと。

うあー、まいったー。満員電車から降りた後、たまにみかけるんだよね、たまたま隣り合わせた見知らぬ女にべったり化粧をこすりつけられちゃってるリーマンとか。あたしはずっと気をつけてたってのに、こんなところでやっちゃうなんてー。沢村くんにも悪いことしちゃったなあ、クリーニング代出させてもらわないと。

そもそもそんな事態に陥ったのは、沢村の信じられない告白がきっかけだということをすっかり忘れている梓である。化粧をきちんと直してからトイレから出ると、その前の通路で所在なさ気に雑誌をパラ見している沢村の姿が目に入った。

「あ、済みました？」

笑顔が眩しいのは、照明のせいなのか、それとも自分の心のせいなのか。

「……ごめん」

「？　何がですか？」

「スーツ。べったり化粧、つけちゃったよね？」

ほんとうに申し訳なくて小さめの声で言うと、沢村は「何だ、そんなことか」と言いたげな顔で笑ってみせた。

「上着の前を開けてましたから、汚れたのはワイシャツだけで済みましたよ。前さえ閉めちゃえば、全然わかりません」

「でも内側は汚れちゃったよね。クリーニング代は出すから」

「いいですって。そもそもそうなった原因は俺なんですから」

トイレを借りた礼代わりに適当に飲み物を買って、ふたりそろっ

てコンビニを出る。駅までは、歩いてあと十分くらいだった。

何を話していいのかわからずに、梓は何も言えない。沢村も何も言わない。ふたりでゆっくりと歩きながら、駅へと向かって、電車に乗る。電車の中はちょうど学校帰りや仕事帰りの人たちでごった返していたが、無言のままに沢村がいろいろと気を遣ってくれて、梓はそれほど辛い思いをしなくて済んだ。最近ではそれが当たり前のようになっていて、いままで気が付かなかったけれど……梓自身が気付かないほどにさりげなく、沢村は自分を労わってくれていたのかと思うと、これまで気付かなかった自分の鈍さが情けなくなってくる。いったい、いつから？　やっぱり、あの初冬の日以来なのだろうか。

「じゃ、俺はここで」

乗り換えのために降りた駅で、沢村は笑顔で手を上げる。

「また明日、よろしくお願いします」

「あ、うん。頑張ろうね」

それだけ言って、実にあっさりとふたりは別れる。梓とは違うホームへと向かう沢村の後ろ姿を見つめながら、梓はひとり、つい数十分前のことを思い出す。

『何度でも言います。尊敬や憧れなんかじゃない。等身大の貴女だからこそ、俺は貴女が好きなんです――――――』

素のままの梓でいいと。沢村は言った。虚勢も意地もすべて取り払った、素顔のままの梓でいいと……。

ほんとうに。このままのあたしでいいのかな。何も気負わない、何も飾らない自分で……。

何だかとても、気分が軽くなった気がした。そんなこと、いままで誰にも言われたことはなかった。いつだって誰だって、梓の見せている面をほんとうの彼女だと思っていて。「支えたい」なんて…ましてや「守りたい」なんて、言われたことはなかった。梓自身が隙を見せなかったせいもあるのだけど。五歳も年下の男の子――――優樹菜と同じく、二十代に入った相手に『子』なんて失礼だけど――――に、甘えても…よいのだろうか。

自分でもわからない感情を胸に抱えたまま、梓はそっときびすを返した。

素顔のままで（後書き）

少しずつ縮まっていくような、梓と沢村の距離…。
梓は果たして素直になれるのか。

彼女と彼女

それからしばらくはいい天気が続いて。理由もないけれど、梓は何となく気分よく出勤することができた。優樹菜の冷たい視線や態度は相変わらずだけれど――――さすがに仕事がらみの時は普通に接してはくるが、他の相手との温度差が顕著なのだ、非常にわかりやすい――――以前ほど気にならなくなっている自分に、梓は驚いていた。以前から感じていた、自分でも説明のしようがない罪悪感はまだ多少残ってはいるものの、それでも平気でいられるのは、去年の初冬以来、少しずつ成長していっている沢村がそばにいるせいか。

あの翌日以降、沢村とどんな顔をして会えばいいのかわからなかったけれど、一晩経ってみたら、意外に素直な気持ちで接することができている自分に気付いて、梓は自分自身に軽く驚きを覚えていた。ほんとうの自分を知っていてくれるひとがいるというだけで、こんなにも心が楽になるものなのだろうか？　女友達ともまた違う心強さを、沢村の存在から感じ取っていた。

「最近の坂本くんは、何だかいい感じだね。肩から力が抜けたとでもいうのかな」

昼食時、亮子と食堂で食事をしていた梓の向かい側に座った岡田が笑顔で切りだしてきたので、梓は驚いてしまった。

「そんなに以前のあたしは、力が入り過ぎてました？」

「うん。何ていうか、『女だからってなめられてたまるか』って感じで、すごく肩肘はっているように見えたというか。見ていて、何だか力み過ぎてる感じがしたかな」

「ああそれ、わかる気がします。もちょっと余裕持てばいいのにって、あたしもいつも思ってました」

亮子にまで言われてしまうのなら、ほんとうにそうなのだろう。

「そうですか……」

思わず、少し反省してしまう。そういえば、「ちょっと声をかけづらい」と言われたことも一度や二度ではない。

「でも最近、角がとれたっていうのかな。雰囲気がやわらかくなった感じで、すごくいいと思うよ」

岡田こそ、いい感じ全開の笑顔で言うので、亮子ともども思わず顔を赤らめてしまう。

「係長こそ、最近ますますいい感じじゃないですかー。何かあったんですかー？」

「いやあ、何もないよ。それはともかく、坂本くんは営業としても女性としても、これからはプラスになっていくんじゃないかな」

「あ、そうそう。いまは梓の話だったわ。で、どうしたの？　いいひとでもできたのー？」

亮子が指でつんつんと、梓の食べ物が詰まったリスのような頬をつついてくるので、ぺしっとはたき落としてから、口の中の物をごくりと飲み込む。

「何もないわよー。ただ最近、指導している沢村くんの成長めざましいから、それで安心しちゃったかな」

それも事実。思い返せば去年の初冬以来、沢村の気合いの入りようは目をみはるほどだった。「梓を支えたい」と言った言葉は嘘ではなかったということか。

「ああ、それはそうかもね。うちでも噂になってるわよ、沢村くんが一皮むけたって」

「確かに、それは見ててわかるよ。何か、心境の変化でもあったのかな」

答えを求めるかのように二人が梓を見つめてきたので、お茶を一口飲んでから梓は軽く咳払いをして。

「ようやく、社会人としての心構えができてきたってことかしらね」

と、すっとぼけて答える。

「何をえらそーにっ」

「ちょい待った、亮子、ギブギブっ」

などと浮かれていたから。梓は、自分が大事なことから目をそらしている事実をあえて忘れていたことに、その直後嫌というほど思

い知らされることとなる。嵐は、もうすぐそこにまで迫っていた……。

その日の夕刻。営業先から沢村と共に帰社した梓は、総務部の前を通った折にふと用事を思い出して、沢村に声をかける。

「悪いんだけど、この書類、総務部に提出しといてくれる？　自分で出すのが筋なんだろうけど、あたし戻ったらすぐ課長のとこに来いって言われてたのよ、ごめんね」

「あ、いいですよ。先に戻っていてください」

「ホントごめん、頼むわ」

書類を沢村に手渡して、総務部の前で別れる。そのまま数メートル歩いてから、他にも総務部に用があったことを思い出す。しまったと思いつつ、来た道を戻ったその時。偶然にも、見てしまったのだ。沢村と岡田が話している様子を、同じ女の自分から見ても胸が締め付けられそうになるほどにせつない瞳で見つめている、優樹菜がいたことに……。

「――――っ！」

その瞳は深い悲しみの色に彩られていて……いまにも大粒の涙がこぼれるのでは無かろうかと思ってしまうほど、せつな過ぎる瞳だった。その小柄な身体の中に、どれだけの深い苦しみを抱え込んでいるのか。いままで見た優樹菜の表情の中でも、段違いに憂いを帯びた瞳で――――優樹菜が梓に気付いて慌てて目をそむけるまで、梓は目が放せなかった、その瞳から。

あのコはほんとうに……沢村くんのことが好きなんだ――――――。

胸の奥で眠っていた罪悪感が、むくむくと大きくなって首をもたげ始めたのが、梓にはわかった。自分があえて目をそらしていた事実――――自分が沢村の優しさに甘えている陰で、以前の自分のように泣いているひとがいるというそれだ――――その事実が、梓の心に暗い影を落とした。沢村のことは好きだ。けれどそれは、やはり後輩として、と、自分の貴重な理解者として…ではないのだろうか。優樹菜のように、あんな真剣な瞳で、感情で、沢村を想っているのかと言われると……答えられない。沢村は、あくまでも梓の気持ちを尊重して、無理に梓を自分のものにしたいとは思っていないとハッキリと言った。自分はその沢村の優しさに、甘えているのではないのだろうか？

「先輩？」

オフィスに戻って業務に励んでいても、その考えが頭から離れなくて、ついには不審に思ったらしい沢村に声をかけられてしまった。

「どうしたんですか？　気分でも悪いんですか？」

「う、ううん、何でもないよ」

そう答えるしか、梓にはできなくて。

そうして、決定的な出来事が、その翌日に起こってしまったのである……。

午後。バサバサっ！と、大きな音が鳴り響いて、皆が思わずそちらを向いたそこで、優樹菜がへたり込んでいる姿が梓の目に映った。歩いている最中に貧血でも起こしたらしく、派手な音は優樹菜の持っていたファイルの束が落ちたためだということにすぐ気付いた。

「千葉さん、大丈夫！？」

慌てて声をかけるが、優樹菜の顔色は真っ青だ。近くの総務部に誰かが知らせたらしく、岡田が焦った表情で駆けつける。「ちょっと失礼」と一言断って優樹菜の小柄な身体を抱え上げるのを見て、梓はそばにいた総務の別のＯＬに声をかける。

「あなた、このファイルを総務部に持っていって。係長、医務室まで先導します」

一応自社ビルなので、医務室なるものも存在するのだが、医者は常駐まではしていない。けれど一応常備薬やベッドという設備は整っているので、とりあえず休ませるには一番適切な場所だ。

「沢村くん、悪いけどこれあたしのデスクに置いておいて」

背後にいた沢村に書類や資料を渡して、梓は小走りで岡田の先を進む。幸運なことに、突き当たりはエレベーターホールだから、医

務室のある階まで一直線に行ける。岡田が追いつくより速くボタンを押すと、さらに幸運なことに岡田がたどり着くと同時にチャイムが鳴って、エレベーターの扉が開いた。開ボタンを押したまま目的の階のボタンを押して、岡田が乗り込むのを確認してから、閉ボタンを押してドアを閉める。

「す…すみませ……」

「いいから。少しの間だけ辛抱していてくれ」

か細い優樹菜の声に岡田が即座に応えると、優樹菜は力なくこくりとうなずいた。

医務室には誰もおらず、清潔そうなシーツのかけられたベッドの上に、岡田はまるで壊れものを扱うかのようにそっと優樹菜を下ろした。優樹菜の顔色は相変わらず真っ青で、目を開ける余力もないのか目を閉じたままぐったりとしている。

「千葉くん、意識はあるか？　私が誰かわかるか？」

「は、い……」

「車で病院に連れていったほうがいいだろうか？　それとも救急車を呼んだほうがいいだろうか」

「い、いえ…っ　そこまでする必要は…ありません……っ」

その言葉でぴんときた梓は、

「しかし、その様子は尋常じゃないぞ」

と心配そうに続ける岡田の言葉を遮るように口を挟んだ。

「係長、とりあえず二、三時間寝かせておいて、それでも回復しなかったら病院ということで。後は私にまかせて、一度オフィスに戻ってください。何かあったら、すぐ内線でお知らせしますから」

そう告げると、岡田はようやく普段の冷静さを取り戻したようで、狼狽しながらもうなずいてみせた。

「そ、そうだな。とりあえず、同じ女性が付き添っていたほうがいいだろう。済まないが、坂本くんそうしてくれるかな。営業の課長には私から連絡しておくから」

「はい」

「じゃあ、千葉くん。私は一度戻っているから、何かあったらすぐこの坂本くんに言うんだぞ。くれぐれも無理はしてはいけないぞ」

岡田が言うと、優樹菜は消え入りそうな声で「はい…」と答えた。それを見て安心したのか、岡田は梓に一言二言告げてから、そっと医務室から出ていった。あんなに狼狽した岡田の姿を梓は初めて見たので、驚きを隠せない。が、それはとりあえず横に置いておいて、「さて」と呟いてから優樹菜に優しく声をかける。

「千葉さん、とにかく楽にしていたほうがいいから、とりあえず服を緩めるわね。ちょっとごめんなさいね」

断ってから、優樹菜の制服のベストやブラウスの第一ボタンと、

スカートの腰のホックを緩めて、その上から上掛けをかけてやる。
それから、常備薬の棚を見回しながら、再び声をかける。
「係長の前じゃちょっと訊けなかったけど、もしかして千葉さんいまアレだったりする？」
女性が貧血を起こす第一の理由に挙げられる可能性を挙げてみる。
「はい……実は、二日目で…」
「ああ、やっぱり。重い人はホント重いっていうものね、辛いわよね」
梓はここまで重いほうではないが、同じ女性として辛さはわかるので、つい同情してしまう。
「なら、とりあえず常備薬を飲んでおけば大丈夫かな。それとも、もうお薬飲んでたりする？」
「いえ…今日はまだ……」
「そう。なら、友人から聞いた、よく効くって評判のを出してみるわね。でもあんまりひどいのが続くようなら、一度病院で相談してみたほうがいいかも。将来赤ちゃんを産む、大事な身体ですものね」
言いながら、最近友人から聞いた薬を棚から出す。医師が常駐していない分、常備薬の豊富さは見事なもので、梓は思わず舌を巻いてしまった。やっぱり口コミで「いい」と評判になったものをどんどん入れているのかな、などと半ばどうでもいいことを思いながら。

「辛いとこ、ちょっとごめんなさいね。とりあえず少しだけ起きて、お薬だけ飲んでもらえるかな？　あとは、寝ていれば大丈夫じゃないかと思うんだけど」

そっと手を貸して優樹菜を起き上がらせて、薬とグラスに汲んだ水を慎重に手渡す。優樹菜が飲み干すのを確認してから、それを受け取って脇に置いて、もう一度手を貸して再び横たわらせる。上掛けをかけ直し、グラスや薬の残りを片付けていた梓の耳に、か細い声が届いた。

「――――――すみません……」

「いいのよー、同じ女同士、困った時はお互いさまよ」

「そっちじゃ、ありません」

「え？」

見ると優樹菜は上掛けでほとんど顔を隠し、どんな表情を浮かべているまでは見えない。

「あたし……嫉妬してたんです」

いえそれはバレバレでしたがと、梓は内心で呟く。

「あたしの好きなあのひとと、とっても仲が良くて。その上美人で仕事ができて、あたしには真似できないぐらい大人の女性でカッコいい坂本さんに……嫉妬して。一生懸命、嫌いになろうとしてたのに。あたしの気持ちになんてとっくに気付いてたんでしょう？　なのに、こんなに優しくしてくれて……あたしなんか、とてもかなわ

ない。あのひとが好きになるのも、当然です……」

最後のほうは完全に涙声になって、優樹菜は一気に言いきった。考えなくてもわかる。これが、演技でもなく優樹菜のほんとうの気持ちそのものだということが。梓の胸が、ずきんと痛んだ。

「あたしだって……貴女が思うほど、できた人間じゃないわよ」

思わずぽつりと呟く。

「え？」

よく聞こえなかったらしい優樹菜が聞き返すのをあえて黙殺して、笑顔を浮かべながら優樹菜の頭を優しく撫でる。

「貴女は可愛いわよ……あたしなんかよりずっとずっと。正直に自分の気持ちを恋仇に話せるその素直さが、いまのあたしには眩しくて仕方ないわ」

それは、梓がとうの昔にどこかに置いてきてしまった、懐かしい感情。

「もう、何も考えないで。いまはとにかく、ゆっくりお眠りなさい。また後で、様子を見に来るから。いいわね、何も考えないでぐっすり眠るのよ。そうすれば、目覚めた時にはきっとスッキリしているから――――――」

それだけ言って、優樹菜の頭を軽くぽんぽん、とたたいてから、梓は医務室を後にする。それからみずからのオフィスに向かって歩きだすが、いまはエレベーターに乗りたい気分ではなかった。社屋

の端のほうにある階段を、ゆっくりと上がりだす。

「……っ！！」

思いだすのは、たったいま垣間見た優樹菜の涙。彼女はほんとうに……沢村が好きなのだ。こんな、何もかも中途半端な自分とは違い、一途に真剣に。なのに、自分はそれを知っていながら沢村の気持ちに甘えていた。自分などより、よっぽど弱い存在がより沢村を必要としていたのに。

自分は狡い女だと、思わずにいられなかった。初めて自分の内面を理解してくれた人を得て、自分だけが楽になろうとしていた。あんなにも、あんなにも素直な気持ちを優樹菜は自分に吐露してくれたのに。五歳も年下の後輩たちに甘え、ぬくぬくとその恩恵にあずかろうとしていた自分自身が、汚らわしく思えて仕方がなかった。そんなこと、許しておけるはずもなかった。

だから、決意した。誰よりも素直に、嘘偽りのない自分たちの気持ちをぶつけてくれる後輩たちのために、自分ができることをするために。自分はもう、大丈夫だから。一度でもちゃんと理解してくれる人に出逢えたから、それだけでもう十分だった。それだけで、これからもきっと戦っていけると思うから、だから。あの可愛らしい後輩たちのために、先輩として自分にできることをやるだけだと梓は思う。それが、自分にできるただひとつの恩返しだから。

だから、終業時刻になってから、仕事を手早く切り上げて、沢村のデスクに行った。

「沢村くん、キリのいいところで切り上げて、ちょっと来てくれる？　大事な話があるのよ」

そう告げると、沢村は快諾して、仕事を早々に切り上げて椅子から立ち上がった。

「はい。どちらに行かれるんですか？」

「そうね、天気もいいし、屋上にでも行きましょうか」

全身から、心のすべてから勇気を振り絞り、できるだけ何気なさを装って、沢村を背後に従えて梓は歩き始めた――――――。

彼女と彼女（後書き）

梓が思っていたよりずっとずっと純粋だった優樹菜の想い…。
梓はいったいどんな決意をしたのか？

届かぬ想い

――――――さあ。一世一代の大ボラを吹こうか。

夕刻になったというのに、屋上はまだまだ明るくて。夏が近いことを、とことん実感させる。

「うーん、この季節の屋上は気持ちいいねー。あー、そろそろ夏服も買いに行かなきゃなー」

「話って…何ですか」

浮かれた声を上げる梓とは対照的に、沢村の声はどこか硬い。まるで、梓がいまから言わんとしていることを予想しているかのように。

「まあそんな焦らないで。少しはリラックスしなよー」

「話って何ですか」

故意に明るく装っている梓を見透かすような、真剣な瞳が梓の瞳を射抜く。虚勢を張っていられなくなってしまいそうだったが、それでも梓は全身全霊の勇気を奮い立たせて、極力何気なさを装って言葉を紡ぐ。

「……あー…せっかく、『好きだ』なんて言ってくれたけどさ。あ

たしやっぱり、君のことは後輩としか思えないんだよね」

できることなら、いますぐこの場から逃げてしまいたい。声が震えないようにするだけで精いっぱいで、沢村の顔がまっすぐ見られなくて、手すりに手をかけて沢村に背を向けて空を仰ぐ。

「だから、こんな五歳も上の女のことなんかとっとと忘れて、次に行ったほうが賢明だよ？　君はまだまだ若いんだし」

できるだけ年上であることを強調するような口調で続ける。

「それは……俺には万が一の可能性すらないということですか」

「そうそう、千葉さん。さっき医務室で少し話したんだけど、あのコ中身もすっごく可愛いねえ。あんなコなら、すごいお似合いだよ。結婚でもしたら、キューピッド役としてスピーチでもしたげよっか」

「……何で俺の顔を見て言わないんですか」

「あのコも君に好意持ってるみたいだし、いま声をかけたらきっとすぐつきあえるよ。うん、こんなアラサー女よりそっちのほうがいいに決まってるって！」

「何で質問に答えてくれないんですかっ　俺の目を見て、もう一度同じセリフを言ってくださいよ！」

唐突に手首をつかまれて、強引にそちらを向かされる。マズい、と梓は思った。いま沢村の顔を見たら、平気な顔でなんかいられない！

「あ……」

もう、笑顔なんて作れない。

「俺のことが迷惑なら、そう言ったらいいでしょう！？　なのに、何でそこで他の女の名前なんて出てくるんですか！」

「だ…だって、あたしは他人に嫉妬するくらい君のことが好きだなんて、言えないものっ　あんな、あそこまで我を忘れるくらい好きかなんて、答えられないもの…っ　だったら、もっと好きだと言ってくれるコに行ったほうが、君にとっても幸せじゃないっ！！」

もう、冷静を装ってなどいられない。

「…千葉がそう言ったんですか。俺の名前を出して、『好きだ』って？」

「名前は言わなかったけど……あたしと仲がいい人なんて、他にいないじゃない…だから」

あたしなんかよりあのコとつきあったほうが、きっと幸せになれるから――――――。

もっとスマートに話を進めるつもりだったのに、なんてザマだと梓は思う。どうして沢村がからむと、自分はこんなにみっともなくなるのだろう？

うつむいたまま、沢村の顔が見られない梓の手を引いて、沢村は歩きだす。確固たる目的地でも決めているかのように、迷いのない足取りだった。

「ちょ…っ　ど、どこ行くの！？」

「医務室へ。多分千葉もまだ帰っていないでしょう。こうなったら、千葉も含めて三人で話しましょう。そのほうが早い」

なんということを言い出すのだ、この男は！？　あんな、心も身体も弱っている彼女に決定的なショックを与えようというのか！？

「や、やめてよ、沢村くんっ　彼女はいま、すごく弱ってるのよ、そんな時に話なんてできる訳ないでしょうっ！」

「いまじゃなきゃ、意味がないんですっ！！」

梓ですら気圧されるほどの迫力で言い切って、沢村は屋内へと歩を進める。梓が逃げられないように、しっかり手首をつかんだ上で、だ。

梓には、沢村がわからなくなってしまった。あんな、弱りきった彼女にさらにトドメを刺すような冷酷な真似をするような人間だとは、思ってもみなかった。それとも、自分と梓以外の人間はどうなってもいいとでも思っているのだろうか？　もうそうだとしたら、梓は沢村をずいぶんと買い被っていたことになる。

エレベーターに半ば無理やり連れ込まれて、医務室のある階へと向かう。退勤するところらしい他の社員の好奇の目が梓には痛過ぎたが、沢村は怒りのために気になっていないのか、まるで気にしている様子はない。どうしてこんなことになってしまったのだろう？

優樹菜に申し訳ない気持ちで胸がいっぱいになる。自分がもっとうまく立ち回っていれば、こんなことにはならなかっただろうに。

チャイムと共に、エレベーターが目的の階に着く。沢村の手を振りほどけないままエレベーターから連れ出されて、医務室へと向かう。梓はもう泣きたい気持ちでいっぱいだった。沢村の拳が医務室の扉をノックしようとしたまさにその時、予想もしていなかった大声が中から響き渡った。

「どうしてもっていうのなら、いっそのこと『お前なんか大嫌いだ』って言ってくださいよっ！！　そうしたら、いくらものわかりの悪い私だって、きっぱり諦められますからっ！！」

「……っ！？」

梓には、信じられなかった。だって、中から聞こえたのは、弱りきって休んでいたはずの優樹菜の声だったのだから！　いつも鈴を転がすような可愛らしい声の彼女が、興奮しきってあんな大声を上げるなんて、いったい何事が起きたというのだろう！？　梓と沢村はいまだ室内に入ってすらいないのだから、ふたりに対しての言葉ではないのだろう。相手はいったい誰なのかと思ったが、相手は沈黙を守っているのか、相手の声は聞こえない。

「――――もういいです。出ていってください。いますぐ私の前から消えてくださいっ！！」

わあっと優樹菜の、もう何も気にしていられないほどに追い詰められたような泣き声がその場に響いた。いったい、誰と、どんな話の果ての顛末だというのか。次の瞬間、またも信じられない声が梓の耳に届いた。梓のよく知る人物の、やはりこれまで聞いたこともないほどに苦々しい響きを宿した声だった。

「……後で家まで送っていくから。もう少し、ここで休んでいなさ

い」

カチャ…と静かな音と共に、ドアが開く。声で予想はしていたものの、姿を見てもまだ信じられなかった。声と同じく、いままで見たことがないほどに辛そうな表情を浮かべた、岡田係長そのひとだったから――――――。

「……」

驚きと、とんでもないところに居合わせてしまったという申し訳なさで、岡田の顔がまともに見られない。それは岡田も同じことだっただろう。気まずい空気が、二人の間に流れる。沈黙を破ったのは、既に梓の手首から手を放していた沢村の、怒りを抑えているかのような低い声だった。普段の、上司や先輩に対する態度とはまるで違う、ひとりの対等な大人の男としての、それだった。

「――――――貴方たちは。『俺たちのため』とかもっともらしいことを言って、そうやって俺たちの想いをはぐらかすんだ。『まだ若いから勘違いしてるんだ』なんて、貴方たちは俺たちじゃないのに、どうしてそう言い切れるんです！？　若いからって、人を真剣に好きになる資格はないとでも言うんですか！？　そんなのは、ただの貴方たちの思い上がりだ！！」

そこまで一気に言い切ってから、治まりきらない怒りを吐き出すかのように、沢村ははあと息をつく。梓は口元を手でおおったまま、何一つ言葉を発することができない。あまりにも、いま見聞きした現実が衝撃的過ぎて。何も答えない岡田に一瞥もくれることなく、沢村はその横を通り過ぎながらやはり怒りを抑えているような低く硬い声で呟いた。

「……千葉は俺が送っていきます。今日はもう、彼女に顔を見せないでやってください。貴方に少しでも情があるのなら」

梓にはひとことも告げることなく、パタン…と静かな音を立てて医務室の扉が閉められる。その一連の動作が、まるで沢村の心から閉め出されたような錯覚を梓に与え、その手を震えさせる。優樹菜が言った「あのひと」とは、沢村のことではなかったのか？　いま梓の目前にいるこのひとのことだったとすれば……自分は、とんでもない思い違いをしていたことになる。

それまで無言だった岡田は、いまやっと梓に気付いたかのように自嘲気味にふっと微笑い、中に聞こえないほどの声でそっとささやいた。

「……今夜は…飲みに行こうか――――――」

その言葉に、梓はただうなずくことしかできなかった……。

届かぬ想い（後書き）

ついに明かされた意外な真実。
岡田の内心は？　そして梓と沢村の行く末は……。

たったひとつの真実

「最初に『好きだ』と言われたのは……去年の初秋のことだったかな」

岡田の行きつけの店だというバーのカウンターで、岡田がぽつりと呟いた。テーブルに置くと同時に、グラスの中の氷がカラン…と小さな音を立てた。

「よくあることなんだが、社会に出たばかりの若い子が抱く単なる憧れだろうと思って、『ありがとう』とだけ答えて……それで、終わりになるはずだったんだ。いつもならば」

梓は、ただ黙って岡田の独白ともいえる言葉を聞いていた。初めて聞いた名前の、綺麗な色のカクテルを飲みながら。

「だけど、彼女は諦めなかった……事あるごとに、上司と部下という関係を越えた気遣いや意思表示を見せてきて。気付いたら、ただの部下として以上に『可愛い』と思う自分がそこにいたよ」

そこで岡田は、過去を思い出したのか淡く微笑んで見せた。優しい微笑みなのに、どこか苦い自嘲を含んでいるように見えたのは、果たして梓の目の錯覚だったのか。

「自覚すればするほど、焦ったよ。何しろ私はこの年で……おまけに一度妻まで亡くしているだろう？　妻に申し訳ないと思う気持ちもあったし、彼女のご両親はどう思われるだろう、とか、何より、

彼女の未来の可能性まで潰してしまうんじゃないかという思いが交錯して……年をとればとるほど臆病になるというのはほんとうだな」

はは…と岡田は情けなさそうな顔で笑った。

「…なあんだ。じゃあ亮子が言ってた、係長があたしを好いているって噂はデマだった訳ですね。ホント、人の噂というものは……」

優樹菜の想い人の件といい、いい加減なものだと梓は思った。

「ああ、それはあながちデマでもないかな」

「えっ！？」

そこで岡田は、唐突にやわらかい――――何か懐かしいものを見るような瞳になって、梓を見返してきた。梓の胸が、一瞬高鳴る。

「…坂本くんは、亡くなった妻に似ているんだ。妻も元気な人でね、食べるのが何よりも大好きと豪語する女性だった」

なあんだと梓は思う。ときめきを返せと、冗談交じりに内心で呟きながら。

「何があっても……私より先立つことなんてないと――――あの頃は真剣に思っていたのに。乳癌だとわかった時には、もう遅かった。既に手の施しようのないほどに進行していて……あんなにも健康的だった妻が日に日に痩せ細っていくのを見るのは、身を切られる思いだったよ……」

そうだったのか。だから梓が入社した頃、岡田はどこか遠くを見

るような、それでいて優しい目をしてよく梓を見ていたのかと、六年目にしてようやく得心がいった。

「…話を戻しますけど。千葉さんには、その想いをそのまま伝えてあげればいいと思います。『嫌いと言ってくれ』と言われて何も答えられなかったのは……係長の心がもう決まっているも同然だったからでしょう？　その後、事態がどう転ぼうが……ふたりとも後悔しない結果にしかならないと、あたし個人は思います」

そう。理屈でいくら武装していても、とっさに出た反応こそがその人間の本心だと、梓は思っているから。だから、岡田の肩をたたきながら、そう告げた。

「――――不思議だな。坂本くんに言われると、妻に言われているような気さえしてくるよ。そんなこと、あるはずもないのに」

岡田の辛そうだった表情が幾分和らいだのを見て、梓の心もいくらか軽くなる。少しでもお役に立てたのなら、よいのだけど。

「……ああ。私の話ばかりしてしまって悪かったね。それで坂本くんと沢村くんは、何がどうなってああなっていたんだい？」

予想もしていなかった言葉を告げられて、カクテルを傾けていた梓は、派手にむせてしまい、かなり苦しい思いを強いられることになった。

「あっ　ああ、済まないっ　大丈夫かい！？」

「は、はい……何とか」

ハンカチで口元を拭きながら、梓は何とか落ち着きを取り戻す。アルコールも適度に回っていたし、何より岡田の相当込み入った話まで聞かせてもらってしまったし、もうこの際いいかと思い、気付いたら話しだしていた。この春からの、一連の出来事を――――――。

「……そうか…」

新しい水割りを手に、岡田がぽつりと呟く。梓はといえば、バーテンに新作だというカクテルを作ってもらい、半ば上機嫌、半ば困惑という不可思議な気分を味わっていた。

「サイテーですよね、あたし……勝手に千葉さんが沢村くんを好きだと思い込んで、勝手に仲をとりもとうとしてました。沢村くんが千葉さんの気持ちを知ってたからよかったものの、そうでなかったら千葉さんを更に傷つけるところでした。可愛い後輩のため、なんて言って、有難迷惑にしかならないことをやっちゃうところでした……」

ほんとうに、危なかった。もしほんとうに沢村が優樹菜に心変わりしていたら、あんな一途なコを更に苦しめるところだった。何が「可愛い後輩のため」だ。自分のしたことは、ただ自分が楽になりたいがための自己満足だったのではないかと、梓は自己嫌悪で押しつぶされそうな気分になる。

「あんまり気にし過ぎないほうがいい。もし私が君の立場だったとしても、きっと同じことをしていたと思うから」

岡田はそう言ってくれるけれど、梓の心は晴れない。あんなにも、あんなにも沢村はまっすぐ想ってくれたのに。もう、嫌われてしま

ったかも知れないなと思ったとたん、梓の胸がズキズキと痛みだした。せっかくの美味しいカクテルもすっかり味がわからなくなってしまい、グラスの中身を一気にあおってしまった。

「……でも。これでよかったんですよね。あたしなんかより、そのうちもっとお似合いの女の子が現れますよ。沢村くんは、やればできるひとなんだから、周りの女の子がきっとほっとかないでしょうしね」

できるだけ明るく言ったのに。一瞬驚いたような顔をした岡田が、すぐに優しい微笑みを浮かべて、梓の頭を子どもにするかのように優しく撫でる。

「――――――好きなんだね。沢村くんのことが」

「え？」

一瞬、何を言われたのか梓にはわからなかった。その意味を正しく理解したとたん、思いきり首を横に振って。唇は、慌てて否定の言葉を口にしていた。

「い、いやいやいやいや、係長、何言ってるんですか。そんな訳、あるはずないじゃないですか。沢村くんは、ただの後輩で……」

「じゃあ。君はいま、どうして泣いているんだい――――――？」

優しい岡田の声に、ほとんど無意識に手を顔に当てていた。頬を伝うのは、まぎれもない透明な雫で……。

……好き？　あたしが？　沢村くんを――――？

「すぐに認められない気持ちは、私には誰よりもよくわかるよ。何しろ経験者だからね」

岡田の声も耳に入らないほど、梓の頭の中は混乱に彩られていて。梓はもう一度、自分自身の内心の言葉を反芻する。胸に浮かぶのは、去年からずっと見守ってきた……沢村の姿。

『何度でも言います。尊敬や憧れなんかじゃない。等身大の貴女だからこそ、俺は貴女が好きなんです――――』

沢村の声が、脳裏によみがえる。

そう…か。優樹菜が岡田でなく沢村を見ているとしか思えなかったのは、自分自身が沢村のことばかり無意識に目で追っていたから、だったのか。もっと冷静に客観的に見ていれば、優樹菜の見ているのがほんとうは誰だったのかなんて、すぐにわかったかも知れないのに。そしていま、こんなに傷ついているのは――――もう、あんな風に想ってもらえないとわかっているからだったのか。いまさら自覚しても、もう遅いけれど……。

「係長」

「ん？」

「今日は、サイテーな者同士、もうとことん飲みましょうっ！！」

もう何も考えたくなくて、梓はグラスを掲げ、岡田の持っていたグラスにチン…と音を立てて軽くぶつけた……。

＊　＊　＊

ゆらゆらゆら。まるでラクダにでも乗って揺られているような心地よい揺れに、梓はいつしか深い眠りから覚めてまどろんでいた。

あー……すごい、気持ちいー…こんな首都圏のど真ん中にラクダなんかいる訳ないってわかってるけど、すごいいー気持ち……このまま寝ちゃいたいくらい。

冷静に考えれば、それは誰かの背中だということにすぐ気付くけれど、酔いが回りまくった頭ではなかなかそこに考えがたどり着かない。そうなると、相手は岡田しかいない訳で……。

「あー…かかりちょー……」

喉からは掠れきった予想以上に小さい声しか出てこなくて、梓自

身がびっくりしてしまうほどだった。岡田の耳には届いていないのか、返答はない。目も開けないままで、梓は続ける。

「あらしたちって、ばかみたいれすねー……いーとしこいて、じぶんのきもちにもきづけらいなんてー」

半ば呂律も回っていないけれど、梓の唇は止まらない。

「れもかかりちょーはまだいーれすよー。まだきらわれてらいんらからー。せーしんせーいはにゃせば、きっとちばしゃんもわかってくれまふよー。あらしみたいに、さいてーなことやっておこらしちったんじゃないんれすからー」

けたけたけた…と自分でも何がおかしいのかわからないのに、笑いが止まらない。

「あらしがいちばんばかみたいれすよー。かってにひとりではやがてんして、かってにしきりばばみたいにちばしゃんとさーむらくんのなかをとりもとーなんてしちゃってー。こりゃーあらしのしょーらいはきまりれすねー、あーでもなこーどってけっこんしてなきゃできないかー、じゃあいっしょーけっこんれきなさそーなあらしじゃらめだあ、あはははははー」

笑っているうちに、何故か涙があふれてきて……止まらない。それでも岡田は何も言わない。きっと、呆れ返っているのだろう。

「そんでいまさらさーむらくんがすきだなんてきづいても、もーおそいっての。おそすぎて、かめもなまけものもびっくりってなかんじれすよね、あずさがめなんてしんしゅはっけんーとかってしんぶんとかにのっちゃったりして……」

もう、喉からは声すら出せなくて。嗚咽だけが、堰を切ったようにあふれだす。もう、自分でも止められない。

そのとたん、岡田の歩みが止まって。ゆっくりとしゃがみ込んだと思ったら、梓をそうっと固い何かの上に下ろした。一瞬地面かと思ったが、高さがそれほど変わらなかったことから考えて、公園のベンチかそこらなのだろう。

「……かかりちょー…？」

嗚咽交じりの声でその名を呼びつつ、まるで小さな子どものようにしゃくり上げながら、梓は目を開ける。まず目に入ったのは、街灯を背にしながら自分を見下ろす、誰かのシルエット。街灯の陰になって、顔すらよく見えない。

「――――――いまの言葉。ほんとうですか？」

予想していたよりずいぶん若い声に、あれ、かかりちょーってばいつのまにわかがえったのー、ずるーい、あらしにもそのあんちえーじんぐおしえてくらさいよーなどと、梓は能天気な答えを返す。

「いまの言葉。もう一度言ってください」

なおも続く声。

「えー、あんちえーじんぐー？」

「じゃなくて！」

苛立ったような声が、耳を打つ。もーかかりちょーてば、そんなおおごえあげたらみみがいたいじゃないー、などと呟きながら、梓は懸命に目をこらす。まず目に入ったのは、ずいぶんとカジュアルな男物のジャケット。確か岡田は、今日はブランド物のスーツを着ていたと思ったが……。そんなことを考えている間にも、相手の顔がずいと近づいてきて、完全なる酔っ払いの梓にも、その顔立ちがハッキリ見えるようになった。

「あでー。かかりちょーってば、いつのまにせーけーしたんれすかー。これじゃまるで、さーむらくんみたいなかおれすよー」

けたけたけた。涙を流しながらも、おかしくて笑ってしまう。

「係長じゃありませんよ。よく、顔を見てください」

「えー？」

言われてもう一度よく顔を見ると、確かに谷原章介似の岡田ではなく、ジャニーズ事務所の誰それに似ていると同僚たちが言っていた、沢村の顔にそっくりで……。

「あら、さーむらくんにそっくりなひとー。ごしんせつにおくってくれてたんれすかー、あじがとーごじゃいますー」

「そっくりさんじゃなくて！　沢村巧本人です！！」

そっくりさんじゃない？　本人？　そんな言葉が、梓の頭にゆっくりと浸透していって……その意味を正しく理解した瞬間、まるで風船が破裂するかのように梓の思考が爆発して。そのとたん、信じられない速度で酔いがどこかへ吹っ飛んでしまった。

「ささささささ、沢村くんっ！？」

「やっとわかってくれましたか」

やれやれとでも言いたげに、沢村が肩をすくめた。

「岡田係長が、先輩の携帯から電話してきたんですよ。『迎えに来なかったら、ちょうど週末の夜だし、彼女を連れてどこかのホテルに泊まるから』って。『自分もいい感じに酔っちゃってるし、独身生活も長いから、手を出さない自信がないなー』なんて言われたら、飛んでこない訳にいかないでしょう？」

そ、そんなこと言ったのか岡田係長、と梓は内心で呟く。思いもよらなかった面を見せられて、それなりの年数をつきあってきた梓ですら驚きの極致だ。

「俺もむしゃくしゃしてアパートでヤケ酒飲んでたから車も出せなくて……タクシーで駆けつけたら、誰かさんはぐーぐーのん気に寝ているし。店員さんにはそろそろ閉店だからって急がせられるし。とりあえず店を出なきゃっておぶって歩いてたら、誰かさんは係長だと思い込んで好き勝手なこと言ってるし。とんだ一日ですよ、まったく」

「ご…ごめんなさい」

もう、それしか言うことができない。

「い、いまもそうだけど、夕方も……あたし、てっきり千葉さんは沢村くんのことが好きだと思ってたから、あたしなんかより彼女と

のほうが断然幸せになれると思って…」

「千葉とは、偶然似たような境遇だってわかって、互いに異性の気持ちについて相談し合ってただけです。あっちのほうが歳も離れてるし、奥さんのこともあるから大変だったみたいですけど」

まあでも。係長のあの反応からすると、彼女の想いも近い将来報われるのではないかと、梓はそっと思う。ほんとうに素直で一途なあのコだから。係長も、好きにならずにはいられなかったのだろう。

「で、あっちのことは置いといて。さっき。何て言いました？」

「さっき？」

脳裏に一瞬、亀やナマケモノの着ぐるみを着た自分の姿がよぎるが、その次の瞬間、まるで走馬灯のようにみずからが発した言葉の数々が一気に駆け巡って、梓の顔がまるで活火山の活動のごとく噴火する。頬が熱くて、仕方がない。

「な、何も言ってないっ」

「嘘ばっかり。じゃあ何でそんなに顔が赤いんですか～？」

にやにやにや。ほんとうに楽しそうな顔で沢村が迫ってくるので、梓はとっさにベンチに突っ伏して顔を隠す。

「酔っぱらってたから、あたしは何も覚えてないっ」

顔をおおっていた手をとられて、半ば横たわったまま沢村のほうを向かされる。

「ねえ先輩。誰が好きって気付いたんですか～？　教えてくださいよ～」

わかっているくせに、沢村の追求の手はゆるまない。

「知らない知らない、もう何も知らないっ　あたしののーみそは今日はもう閉店ガラガラっ　はい、おしまいっ」

目尻に、先ほどまでとはまるで違う涙がにじむ。できることなら、このまま死んでしまいたいと思うほどの恥ずかしさだ。梓の涙を見て、さすがにいじめ過ぎたとでも思ったのか、沢村はそっと梓の手首をつかんでいた手を放して。優しく両肩をつかんで、ゆっくりと梓の身体を起こさせてベンチに座らせる。そうして自分は、梓の前の地面にひざまずいて、今度は優しい笑顔を浮かべて梓の顔を覗き込んでくる。

「先輩。もう意地悪は言いませんから。だから、教えてください。先輩の心の中にはいま、誰が住み着いているんですか――――――？」

ずるい、と梓は思う。そんな風に優しく訊かれたら、もう想いが抑えられないではないか。すん、と鼻を一度鳴らしてから、そっと口を開いた……。

＊　　＊　　＊

その後。とくに何が変わったということもなく、日々は過ぎて。世間はすっかり夏真っ盛りになっていた。

「それじゃ、外回りに行ってきまーす」

椅子の背もたれにかけていた薄手の上着を手にとって、梓は上司に声をかけて。背後に座っていた人物を振り返る。

「ほら沢村くん、行くよ。早くしないとよそに先越されちゃうからねっ」

「はいっ！」

「いやあ、坂本くんは相変わらず元気がいいねえ」

などと上司連中に言われるほどの、相変わらずのパワフルさを誇っていた。

優樹菜と岡田はその後、「公私混同はしたくない」という岡田の希望の元、会社の皆には秘密でつき合い始め、プライベートでは仲睦まじく過ごしているようだ。四人の関係に偶然気付いた亮子を含め、時々女三人で遊びに行ったりして、梓ともそれなりに仲良くやっている。

そして、当の梓と沢村はといえば。

「今日こそD社から契約とるよー、気合い入れてこっ！」

「はいっ！！」

仕事の上では相変わらずだったが。会社を出てしばらくしたところで、沢村が梓の耳元で小声でささやく。

「今回の契約、俺がメインになってとれたら、来月の連休に泊まりがけででかけてくれます？」

それを聞いた梓の瞳が、いたずらっぽく輝く。

「そうねえ……考えてもいいわよ。だけど、恋人としてはまだまだ、かな。せめて、あたしと同じくらいの成績を一人であげられるようになってくれないと」

「う…っ　道のりはまだまだ長いっスね……」

沢村の表情がとたんに陰りを見せる。

「嫌なら別にいいのよ～？　あたしもあと二年も経ったら三十路突入だし、親にもそろそろ『見合いでも何でもしてとっとと嫁に行け！』ってせっつかれてるのよね～……」

背中を見せながら後半部分はひとりごとのように呟くと、ちらりと横目で見た沢村の顔に、みるみるうちに気合いが充電されていくのが目に見えてわかった。

「頑張りますっ　押忍っ！！」

「ちょ…っ　どこの格闘家よー」

梓の笑い声が、夏の空に吸い込まれていった……。

――――――そして今日も、新たな一日が始まるのである。

たったひとつの真実（後書き）

という訳で、皆さん落ち着くところに落ち着きました。
予想されていた方はいたかな？
果たして沢村くんは、梓を完全にものにすることができたのか？
それは皆さんのご想像にお任せ致します。

番外編　もうひとつのアンバランス（前書き）

こちらは本編とはちょっと違って、梓の同期・吉村くんと梓の親友・亮子が主役のお話です。
どのへんがアンバランスかは、内容をご覧になればわかるかと。

番外編　もうひとつのアンバランス

よく晴れた夏の朝。
企画課の吉村孝太郎は、いつもとほぼ同じ、余裕で始業に間に合う時間に会社の玄関に到着していた。そのままいつものように中に入り、ほぼ直線の廊下を歩く。

「亮子せんぱーいっ　おはようございまーすっ」
廊下を歩くうち、背後から聞こえてきた声にハッとする。まるで鈴を転がすような涼やかなその声は、昨年入社した新入社員の中でもピカイチと言われるほどの、「総務部のユッキーナ」こと千葉優樹菜のものだったからだ。
「おはよう、優樹菜ちゃん。浮かれちゃって、どうしたの？」
答えるその声は、吉村と同じ企画課で同期の斉田亮子のもの。はっきり言って、そちらは半ばどうでもよいのだ。
「昨日、クッキー焼いたんですけど、結構うまくできたから、お昼休みに梓先輩も一緒に食べましょ♪」
「えー、優樹菜ちゃんが作ったの？　すごいじゃん」
「結構簡単なんですよ？　よかったら、今度梓先輩も誘って一緒に作りません？」
「んー、あたしも梓も、どうせ作るならお菓子より酒のつまみのほうがいいなあ」
「ふふっ　先輩たちらしい」
くすくすくす。ああ、やはり可愛いなあと吉村は思う。声だけではない。優樹菜は容姿も性格も、そこらへんの女性よりよっぽど可愛らしいのだ。そう思う男はやはり多いらしく、吉村以外の男性社員が何人もアプローチをかけて、ことごとく玉砕しているという。
「ユッキーナの本命とはいったい！？」というのが、昨年から変わらず男たちの間で噂される事柄のひとつであったりした。

「斉田、昨日の書類なんだけどさ」
始業直前、自分のデスクについた亮子の元に近寄っていった吉村は、実にさりげなく仕事の話から世間話に移行していくことに成功させた。
「…ところで。さっき聞こえてきたんだけどさ、お前と坂本って、総務の千葉さんと仲いいのか？」
自分用にあてがわれているパソコンが起動し終えるのを待っていた亮子が、視線を書類に落としたままで答える。
「あ、うん。あたしらとは合わないかと思ってたんだけど、あのコすっごく素直でいいコでね。もう妹みたいに可愛いんだ」
あたし妹いないから、よけいかもね。そう続ける亮子に、更に細心の注意をはらってより一層さりげなさを装って、誘いの言葉を口にする。
「今度さ、みんなで飲みに行かないか？　坂本とか他の同期や後輩とか、よかったら…あのコも誘ってさ」
それを聞いた瞬間、亮子が一瞬驚いたように顔を上げて。それからすぐに、にやりと人の悪い笑みを浮かべて、すべてお見通しだと言わんばかりの口調で言葉を発した。
「あー、無理無理。あのコには、あんたたちが束になってもかなわない大本命がいるから。どんなに頑張っても絶対落とせないわよ、あきらめなさいな」
次の瞬間、吉村は普段の冷静さも忘れ、カッとなって答えていた。
「なっ　何でお前にそこまでわかるんだよっ！？　やってみなきゃわからないじゃないかっ」
語るに落ちるとはこのことだということに、幸か不幸か吉村自身は気付いていない。
「わかるの、本人に訊くまでもなくね。それより、始業のチャイム鳴ったし、課長の雷が落ちる前に自分のデスクに戻ったほうがいいわよ」

悔しいが、言われた通りなので吉村はすごすごと自分のデスクに戻る。

思い返せば、亮子という女は最初からこんな感じだった。初めて会ったのはこの会社に入社して、共に研修を受けていた時で。

『吉村…「こうたろう」って名前なの？　あなた』

自己紹介の後の自由時間に、あちらから声をかけてきたのが始まりだった。周囲の同じ新入社員の男どもに、他の人間には気づかれないようにニヤニヤ顔で肘でつつかれたりして、気をよくしたことを覚えている。昔から、女には不自由したことがなかったから――――この甘いマスクと均整のとれたスタイルに加え、並の男には真似のできないほどのファッションセンスと巧みな話術を携えているとなれば、いままで落とせない女などいなかったのだ。だからこの時も、自慢の笑顔をたたえながら振り返ったのだけど。

『そうだよ。かの小泉孝太郎と同じ字だよ』

自信満々で吉村が答えると同時に、その相手――――亮子は頬を染めるどころか露骨に顔をしかめ、一気に急下降したらしいテンションを隠すことなく、不機嫌そのものの声で言い切ったのだ。

『なあんだ。あんな若造と一緒かあ……里見浩太朗と同じかと思って喜んだのにー』

里見浩太朗！？　予想もしなかった相手の名を出され、吉村だけでなく周囲の同期たちも驚きを隠せない表情で彼女を見た。

『あっ　ごめんねえ。このコ時代劇ファンだからさあ、最近の俳優とかには興味ないのよね』

同じく同期で後に亮子の親友となる梓がフォローをするが、もはや吉村の耳には届いていなかった。こんな屈辱は、初めての経験だったからだ。いままで、吉村がその気になっておとせない女などほとんどいなかったというのに……。

いったい何なんだ、この女は！？

それが吉村の、亮子への第一印象だった。その後、まさか同じ企画課に配属されるとは、夢にも思わなかったというのに。亮子は容姿と同じように自信があった仕事でさえも、吉村を軽く上回る結果をあっさりと出し、更に彼女本人はがむしゃらにやっている訳でもなく自然体でやっているものだから、吉村の負けず嫌いの性格に火がついたのは言うまでもない。

こいつにだけは絶対負けたくないと、勝手に吉村のライバルに認定されてしまったが、亮子本人はどこ吹く風だ。

「……どう見ても、好きなコにつっかかってる小学生男児よねえ」

昼休みになってもなかなか食堂にやってこない亮子に、わざわざ企画課にまで覗きに来た梓が呟けば。

「アレ、斉田さんわかっててやってるんですかねえ」

イマイチふたりの関係がわかっていない沢村が続け。

「ていうか、完全わかっててやってるでしょ、亮子先輩」

岡田とつきあい始めてから、精神的に格段に成長した優樹菜が答え。

「まあ、微笑ましいじゃないか」

あたたかい目で後輩たちを見守る岡田がうまくまとめる。

吉村の自覚は、まだまだ先のようであった……。

番外編　もうひとつのアンバランス（後書き）

本編ではあまり出番のなかった、亮子メインのおまけ話です。
完全に亮子の手のひらで転がされている吉村くん、彼が恋心を自覚するのは、いったいいつのことやら……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9196t/

アンバランスな恋をして

2011年10月9日00時33分発行